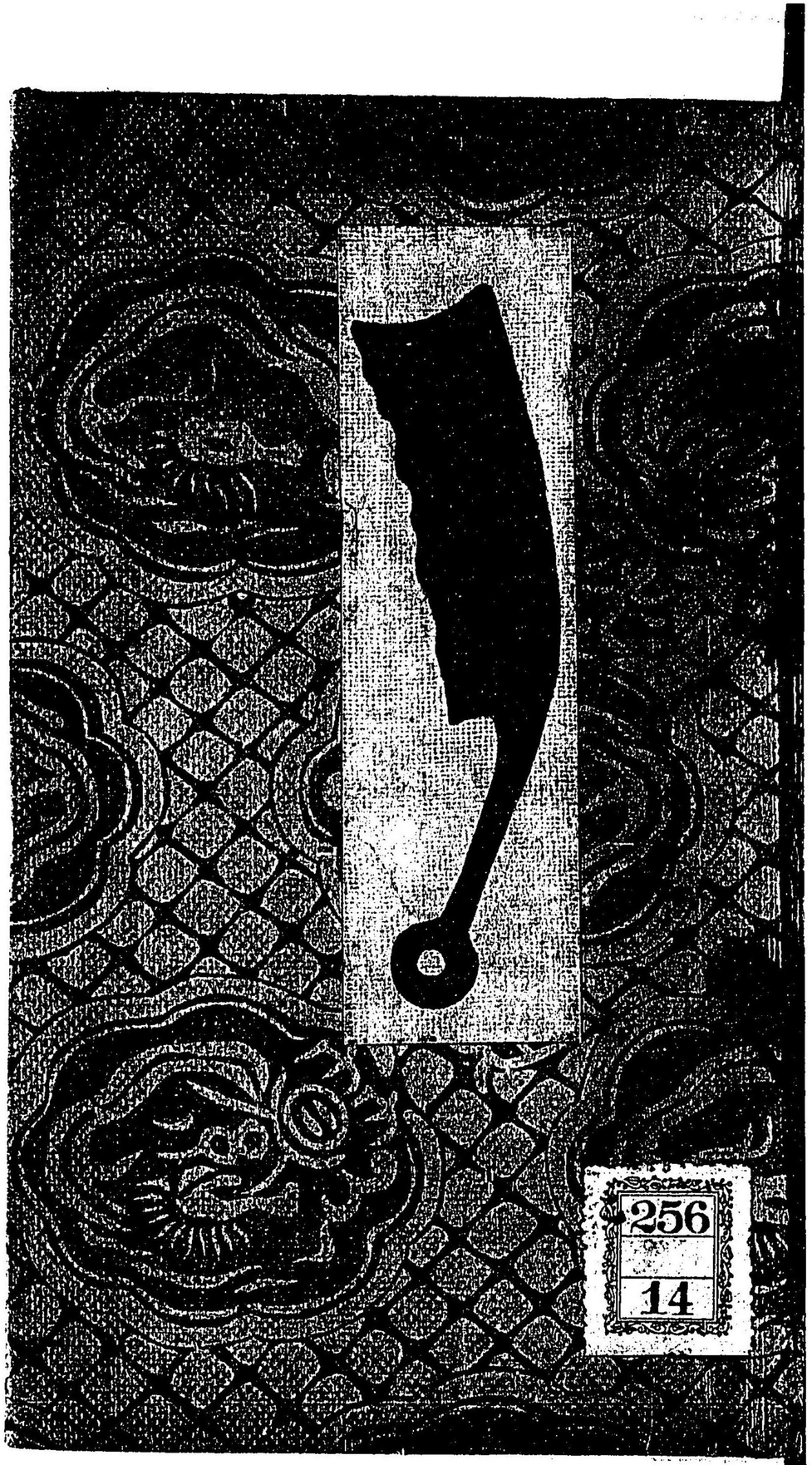


091725−000−3

特22−351

滑稽類纂

京の藁兵衛／編

M39

DBO−0198

特22
351

帝國圖書館藏

紅葉山人序

漣山人序

京葉兵衛撰

滑稽類纂

十二分大吉

日本橋區槇町正
堀野書店出版

明治
39 7 13
内交

我友京の藁兵衛は生粋江戸前の才子なり。夙に光風霽月の胸懷をほしいまゝにして、滑稽洒落の文字を樂む。維新以來我江戸滅亡して、三百年の風流盡く棄れぬる今日、獨り此の好漢ありて、舌頭に妙々の太平樂を並べ、筆下に嫡嫡の魂を傳へて、長へに名物金看板の箔を落さざるは、我輩の爲に頗る三斗の溜飲を下ぐるものと謂ひつべく。因りて聊か其の禮心に叙すと云爾。

三十二年三月

紅葉山人

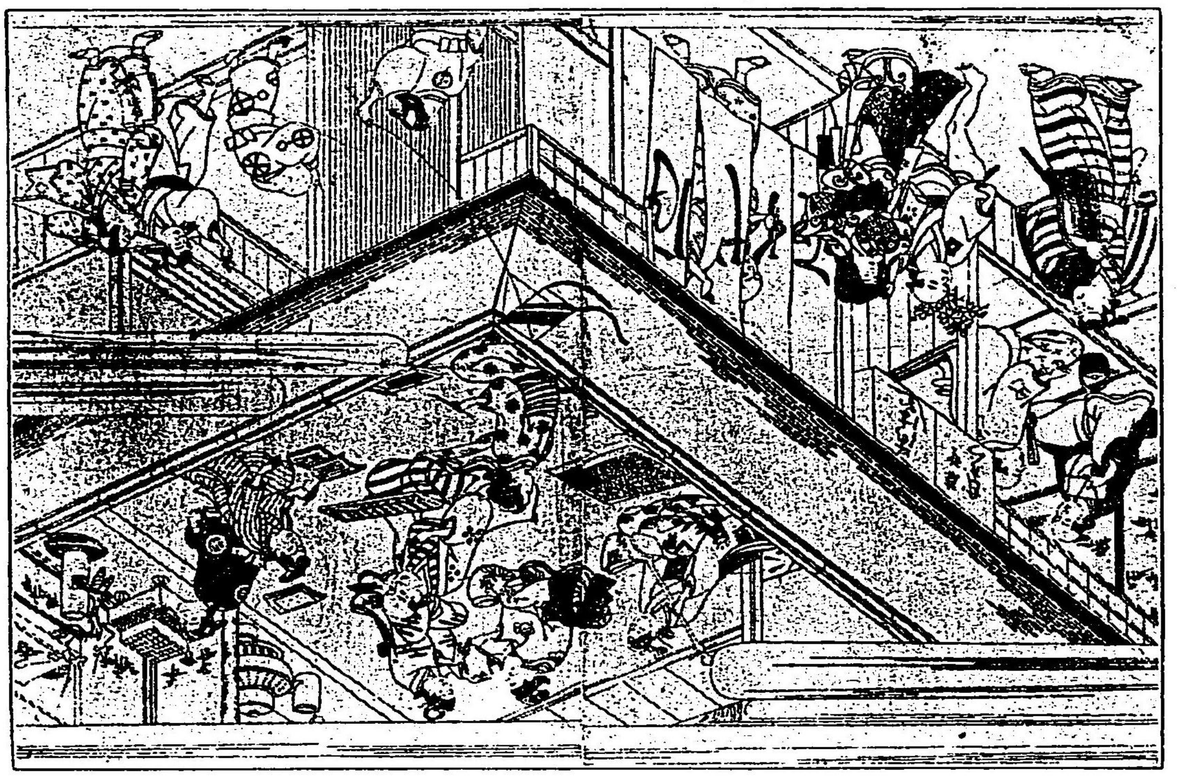
犬のあしあとを梅の花と見む人もよし。あれは鵜でございますといふ渡し守の眞面目もよし。あれもよし。これもよし。よしなに御評判を願ふ一と卷。滑稽類纂と題しぬれど。中には一篇の哀史にまさるくだりもあるべし。

いざ御覽ぜよ。おもしろうしぞ

京の藝兵衛

藝の五郎兵衛辻話しの圖
（近世奇談考所載）

露の五郎兵衛辻話しの圖
（近世奇跡考所載）



唐話ゟ門蔵左式野鹿

三華亭主人抄

安樂庵落語

安樂庵策傳はおとしはなしの上手なり。元和九年七十の年醒醒笑といふ笑話本八冊をつくる。（萬治元年上木せり）　此人茶道において名高しといへども、おとし話の上手なる事を知る人まれなり、世に稱する所の安樂庵の稱は此人より出ぬ。（近世奇跡考）

（前略）　瀬良筆記に「曾呂利新左衛門と同席の折は、新左衛門狂歌を詠て出すに、夫に笑話を述べて興ありたり、いはゝ狂歌を題にして、落し話しを即席に案ずて述し也、又曾呂利狂歌話は策傳の作なり」とも見えたり、策傳は木姓平林氏、平太夫と稱す、京師の人にして吉田のほとりに住めり、最も茶式に精しくして、諸侯の會席へ招かれ、遣次頓沛滑稽を述べて、毎に座客の頤を解けりとぞ、寛永十九年正月八日、享年八十九にして歿せり、著す所の醒醒笑は、笑話本印行の始なり。（演藝婦風會雜誌――關根氏述）

醒醒笑などにおとしのはなしといへる今はこれを落し話しと云ふ、又唐山人俗語に落得一番嘲弄などいへる落字似つかはし。（婦遊笑覽）

○安樂庵策傳は希世の話上手にて板倉侯のために醒睡笑若干卷を著せり、其後延寶天和の頃、辻話に露の五郎兵衛といふものあり、本朝文鑑支考が辻談義説は五郎兵衛が話なり、注云、此者は世にいふ辻話元祖なりと昔祖翁は此ものゝ名を稱して、露の一字には新古の捌あらんと可笑かり給へり云々みゆ、其頃江戸には、鹿野武左衛門といふ仕方話の名人あり、鹿野武左衛門日傳話し　鹿の卷雑などいふ話し本あり、江戸鹿子にたかた話し長谷川町鹿野武左衛門、横山町休慶（風流徒然草にも見ゆ）中橋きやら四郎衛門あり（元禄二年板江戸圖鑑にもかくあり）。また輕口はなしは元禄十四年の草紙なり、それに當世はなし輕口露休と書たる看板を出して居る豆藏の圖あり、五郎兵衛が露を襲ひたるなめり、また元禄末より寶永の頃に彦八といふものあり。（同上）

露の五郎兵衛辻話

支考が本朝文鑑に露の五郎兵衛辻談義の説といふ文をのせて云。此者は夷落に名を知られて洛陽の佛事祭禮に彼が芝居を張ざる事なし、世に云ふ辻話の元祖なり云々、延寶天和の時代なり、祇園眞葛が原或は北野に出し といふ、露がはなしといふ草紙五冊あり。

延寶五年板本　がくれ笠に

尼がゝ　ゝ　ゝ　耳に　おちくるる　物思　高

眞葛の露や　頁に　おくらん　似船

案ずるに、此句、尼がゝが耳におちくるといふを、露の五郎兵衛が辻話しにとりなして、連歌師が、露といふ字を賞におきしといふ事を、ふくませたり。

類柑子にも、「命にかゝる五郎兵衛の露といふ句あり、其頃名高きを知るべし。

上方のひやうたんと、江戸の志道軒等とおなじたぐひなり。（近世奇跡考）

露の五郎兵衛　彦八

露の五郎兵衛の傳は（奇跡考）に見えたれど、法眼しで露休と名をあらためし事と没年の事を脱せり、彼書に漏れたるを二ツ三ツ書殿ておきつ

（好色訓蒙圖彙）　貞享二年印本吉田半兵衛著　に

賤き男の物語りに、きのふもおれは一日茶わかし、相借家をようだ、こちの長家には醫者のあつまりちや、先づいうなん丸之助、きれ藏、露の五郎兵衛、せつきやうでも放家（はうか）でも、見あき聞あきてあんや。

といふ事を敲せり、かうおん丸之助、きれ蔭は説經放家の類なるべけれども未考又

〔二休はなし〕 貞享五年印本 に

百貫目持たる人も色くろひする時は、露の五郎兵衛が手代となる事違からず。

〔毛吹〕 元祿年間印本 雲風子林鴻著 四條川原の事ないふ條に

林清が獣念佛、屑を猶よさむすびたる能芝居、太平記よみ、論の講釋、露の五郎兵衛が夜談義、大的小的揚弓の射場、からくり、鬼の出ところ云々。

〔花の雪〕 元祿十五年印本

秋季にもなるがよ露の五郎兵衛は　京　沼

〔類柑子〕

此　空　の　碁　盤　の　目　も　り　定　な　き　其　角

命　に　か　ゝ　る　五　郎　兵　衛　の　露　野　徑

是等五郎兵衛が現在中の句なるべし

〔輕口置土產〕の序に

四條川原の夕涼萬目の回向こゝかしこの明帳に、場さりし數萬の聽衆に腹筋をよらするの名物天道露休、過

にし元祿末の秋閑浮を去りし道善に、露休が一生の咄の扣帳をくりひろげ、いまだ世間の人に笑はせぬ咄をさりあつめ、古きは擲捨、新きをひろひよせて、露休置土產と名付、全部五卷とし、云々。

此冊子寶永四年の印本なり、元祿末の年とあるは、元祿十六年なるべし。

竹本氏の藏本 〔露の五郎兵衛新はなし〕 の標紙裏に五郎兵衛の畫像あり、傍に俗名露の五郎兵衛　戒名露休　行年六十九歲とあり、元祿十六年に沒したれば齡六十一歲なり、横本にて大坂平野町袋屋三郎兵衛版、寶永五年正月とあり。

〔錢龍賦〕 寶永二年印本 百里撰

茶　俵　を　む　く　る　後　の　が　ん　こ　島　序　合

露　休　と　ゝ　へ　ば　近　い　頃　死　す　朝　臣

〔今樣梓弓〕 寶永五年印本 如鱗著 一の卷に

あるものゝ、夢に世をさりし槻久が來りて告る詞に、我は聞及びたまふらん、難波の槻久なり、色道に身をうち、身は横堀の水の泡と消ぬれど、曲三味線にのせたる通り此道の覺界に落人、今は天氣天に住居をなし、露の五郎兵衛が借家なかり、平野屋德兵衛と相住ひにして、世の人の浮氣を見すまし、心中をつのらす商賣、さりとはいそがしい身なるが、露休もあの方にて輕口咄し受々仕盡し、我に此界におかしき變りたる事見てだん

〳〵知らせよとのいひつけ、いやながら家主の事なれば、此間諸國をまはる　云々。

前に五郎兵衛といひ、後に露休といふを以て、露休と五郎兵衛は同人なるを思ふべし。元祿十二年印本　〔非戸車〕といふ册子に露休が辻咄の圖あり。

〔露休はなし〕　五册あり、彼が名を借て、後人の作りし草紙なるべし、正德二年の刊行なり。

彦八げ雜波の產なり、かの五郎兵衛の類にて、かる口咄しに名あり、彦八が著したる、かる口咄の册子　〔御前男〕　（案に元祿末の印本なるべし）　の序に。

此頃京都へ上りけるに、都の若き衆、なんと彦八雜波にあたらしい事はないか承はらん、されはゆうべ淀川にて、水が物申しましたなんと〳〵といへば、若き衆きゝたまひ、水が物いふ不思議にあらず、こちの都には、露がはなしをすると仰せらるゝ。

案に元祿の頃、五郎兵衛は老年、彦八は盛年にて、正德の頃までも世にありしなるべし　（中略）　又紀の海音が作の淨瑠璃　〔傾城國性爺〕　正德三年版　四段目　島原の事をいふ條に

きやうらんりうのそゝりのけび。せりつけむしんはあふむりう。ゆるめてとるのはぐわんさいりう。彦八おさし。露おさし。やしうあふしうせきしうも。こゝでかひてのいきをひつよく」

といふ源見えたり、きやうらん末考。あふむ、願門は太皷持なり、彦八にならべいふ、露おさしとは、彼五郎

兵衛なる事論なし

〔椒譜が家〕　寶永七年印本　百里撰

むだ藏むかしかむ樂段ト宅

彦八も歟あけ請あげ持はこび巴入

是は圖文百韵にてたしかにきこえかたけれど、まづこゝろみに書きのせて置きつ。

（足薪翁の記）

鹿野武左衛門仕形話

元祿の頃、江戸に坐敷仕形話しといふ事おこなはる、長谷川町の鹿野武左衛門といふ者上手なり、鹿の卷筆と云ふ笑話本五册をあらはす、横山町三丁目休慶、中橋伽羅小左衛門、同所伽羅四郎寮などみな其事に名あり、

貞享四年板　江戸鹿子　元祿二年板　江戸圖鑑に見ゆ。　（近世奇跡考）

（前略）　只誠埃錄に

座敷咄并に仕方咄の始は、長谷川町に住す塗師職人、鹿野武左衛門といへる者、貞享の頃より、中橋廣小路

見世物場に鏡張の小屋をしつらひ、晴天は日々出でゝ大に賑はへり（水戸錢六文と云）其頃の句に

武左衛門の居るは眼はし涼み哉

武左衛門は禍門と譬ふる口舌のために罰を得て、元祿七年二月二十六日、伊豆大島へ流刑、六ヶ年謫居せしが、同十二年四月赦免により江戸に歸れり、然れども身體疲勞して、終に同年の八月沒せり歳五十一と云」とあり。（後略）（演藝矯風會雜誌）

小松百龜　三右門と稱す　元飯田町の藥店なり

（中略）百龜は八十歳にて寛政の頃終れり此人落し噺の上手にて囲上手といひし話しの小册大きに行れたりこれ落し噺小本のはじめなるべし。（假名世說）

〔未完〕

滑稽類纂

目錄

神祇門　一頁

年德神　火事見舞　御勝料　銀の大島

寶船　矢大臣左大臣

釋教門　五頁

自墮落（二則）　思ひの色　あふない事

九分十分日の愁　自殺主　惠心の作三尊佛

だいこく　百萬遍　常念佛　物忘れ　宗論

狩人　仁王　不動　閻魔　大佛　庵室

君臣門

さすがは鶴　御記　梅松櫻　盛替へ　十九頁

遠眼鏡　猫柳　火事　お月見　國家老

親子門

鉢の木　印籠　朝寢坊　生醉　息子洗耳　二十七頁

ごら息子(三則)　軒の燕　二十四孝　異見

武士門

うし　大根　三十七頁

牛が賣れぬ　介錯　武士の情　いかい田分

井戸がへ　流石目

醫師門

醫師の自慢　流行醫者　針醫　藪醫　四十一頁

急病　麁相

疾病門

眼病　若病　氣狂ひ　聖の出る願　四十五頁

貧福門

貧乏神　種籾　泥人(四則)　四十九頁

目腐の工夫　雲潛　鼠　鶴

商估門

夜光の珠　紙屋　人形屋　貝屋　古道具店　五十七頁

夕立雲　八百屋　長い刀　湯屋　六十五頁

婚姻門

●櫛の道　仲人　巻の花むこ　大津絵　隙入
●嫁姑　初夢
○安産　守り刀
○やきもち　二百石　駒本　鉄の女　八十三頁

戀情門

百夜車　通小町　さとり　百鳥おどし
○めかけ　○後家
半分の時あき　下女　白鳥れ　こひ傾

雜夢門

初夢の大吉　冷酒　九十三頁

無常門

極楽　いろ〳〵の願ひ　大蛇　眼下茶
火の玉　幽霊　皿屋敷　反魂香(二回)　九十五頁

歌俳門

ふばさのろ　頓作　百人一首　子日
俳人芭蕉　春興　初卯　百〇三頁

謠曲門

熊野　作者めいわく　論遊ひ　ゆこたつ　百〇九頁

高砂　●泰平樂　●能はうその類

△茶の湯　百十三頁

△立花　百十四頁

△圍碁　百十五頁

△將棋　百十六頁

淨瑠璃門　百十七頁

義太夫　當世ぢや　千本桜　吉原八景

演劇門　百二十一頁

堺町馬の頭見世　芝居氣違　同合者　戎勘定

角力門　百二十七頁

角力と柔術　夢中　角力好

交友門　百三十一頁

羽織　馬の尼　富士山(二則)　狐　孟宗

屠　火鉢　新宅見舞　煙草入　たばこ

燈心　うそつき　狐　ひらめ

飲食門　百四十一頁

禁酒　生醉　たで　皮の年　饅頭　香の物

茶かゆ　砂糖　初松魚(二則)

奴婢門　百四十九頁

無精な供　御年玉　鐵竹　柱暦　注進

慾情門

炎氣轉者　僧上　飯蛸　丁稚　十德
竹光提灯　豆腐　四　新參の使　口上
長坐落書　元日　百六十一頁

吝嗇門

奴の喧嘩　硝子の玉　金のなる樹　よくばり
つり　茗荷　百六十七頁

不學門

頭巾　手紙　つれ〳〵草　假粗
名つけ親力　無筆　人の用　書初　代筆　百七十一頁

無筆字引　はがき　百七十五頁

乞食門

大晦日　行倒れ　腦が飛ぼ石　非人の僧上
しやくりの妙藥　百七十九頁

偷盜門

柿盜人　貧乏者　あべこべ　古道具屋
盜人の逆道ひ　走くら　鋼鐵　盜人に錢
盜人　盜人の樵風　かける名人　釜盜人
腦病　月夜に釜　盜人の辭世　百八十九頁

遊里門

昔の名殘　初台　ゆびはがま　鼠

雜纂門

うづら　くさみ　仮箱　うぬほれ　いき過

自他　歯のあさ　火事　仮　発　鏡さぎ

さし　煙管見物　いきすぎ　あご　地廻り

見たい物　格子　薄雲が猫　れこ　けいこ

手前勝手　全盛の太夫さま　煎餅　お盆

閉帳いんす　隠居、猫　十の字

二百十三頁

うツけ　火の見櫓見立　鹽賣の借上　雨乞ひ

紙帳　ばか賣　熊の膽　鈍漢のしるし

髮ゆひ　れりま　青葉皆め　京都　富士山

靈　むだ　菖蒲　皮　ぶせう(二則)　初たび

賣ト　そうめん　あいさつ　生醇

以上

當時の風俗人情を知るに便ならんがため、笑話の原書名及び出版年號を一々記す。蓋魚幕の偽め判下かたきは未詳とし或は書名或は年號のみを掲げ、尚大方の示教を俟つ。

滑稽類纂

京の藁兵衛撰

正月元日、年徳さまが御登城なさるとき先箱が。惠方〳〵ト聲をかけるとその跡が明き〳〵。（弘化版　寄合噺）

惠比壽どの辨天へ行き昨夜はさぞお騒きでムらふ。ハテなんで。火事でさ。イエわたしは存じませぬ。エヽあの火事を知らぬとはきつい寐やうだの。エヽなるほど昨夜は琵琶を彈じて居りやしたが梯子よ水よといふ聲がきやしたがわたしや福祿さんの月代かとおもひやした。（梅やしき）

御膳料

鎮守様へ御膳を上げて下さりませと錢二百丈さし出せば。禰宜どの手にもとらず。御膳料は金百疋でムるそればかりでは上げられませぬ。アイそんならお茶漬でも。（米群）

銀の大黒

ある人途中にて銀の大黒を拾ひ大きに悦び宅へかへり神棚へ上て置ければ前からあッた大黒さまが腹を立て後から來た大黒を置まいといふに銀の大黒きかぬ氣で。なんだおれに下ろといふのか、ふさふさしいおらは只の大黒ではない白銀様だは、おのおらにあげさげをされるものけい。ヲ、白銀でも古金でもうぬがはりこみをくッてつまるものか、と槌をふり上げて頭をがッちり。もうきかれぬ、と銀の大黒片肌ぬげば下が銅。（同上）

寶船

乘ぞめよしと七福神たち、いつもの寶船よりは今年はおやれて、屋形船とおもうとみな〳〵相談きまりて酒肴の支度をすれば、うしろの方にて。それではおれが乘られぬといふゆへ、みな〳〵振かへり見れば、福祿壽。（林屋正藏作）

福祿壽四五人まいの頭痛がし
福祿壽お辭儀の時はあさひさり
俗めいた名は惠比壽さまばかり
毘沙門のほかは足弱ばかりなり
七歌仙ともいつつべきたから船
正一位塀のうへまで顔を出し
船鉾は人の浪間をわたるなり
わが願に先き棒を切る御代參
鳥居にも笠木上へ見ぬ御神數
これ見よとお禮まゐりに男坂
神主は人のあたまの蝿を追ひ

矢大臣、左大臣

父子して天神様へ参詣なしけるに、息子親父にむかひ。この門の両脇にある矢大臣左大臣といふは何方が矢大臣で何方が左大臣だト聞くに、親父眞面目になり。よく覺えて居けゾレ矢大臣でない方が左大臣で左大臣でない方が矢大臣だ。（未詳）

露も香も聞おほえけり神路山　卓池
神風のあつかろ空や今日の月　一宵
杉むらや稲荷のうらの冬椿　宵里

心だに茅の輪の如くまるかちば潜らずとても神や守らん　蜀山人

祇園會にかゝやきわたる町の名の　松原四へ入るや月鉾　柳下亭曙笠

江戸へ來て役者なたのむ神ほとけ
神佛ないぢるもむすこ道具なり

智慧なき神に智慧つくろ（古諺）

釋教門

自墮落

ひそかに遣はす使ひの小者ひさしく病ふに伏しけり詮方なく坊主自ら魚屋に行く、いかにも夜更しづまりたるに門をたゝくおとせり、うちより誰人ぞと高聲にとがめければ。在家から魚買ひに來た戸をあけよと。（萬治版　醒醒笑）

同

あるひとり坊主烏賊をくろあへにして食るところへ不斗人來たれり口をぬぐはん料簡もなかりつるに。そなたの口は何とて黒いぞや鐵漿をつけられたかと問ふ。いやあまり寒さに只今もえさしを一口くふた。（同上）

思ひの色

所の地頭と中のよき坊主あり、ふるまいに呼ばれ種々食物のはなしありしに。海月といふものは精心めきたる物なりさるほどに出家にもまゐらせたや殿にいふて是をば許しにせんなどかたる、年たけたる弟子きいて。殿へ仰せ上げらるゝついでに生鯛の事も頼み入と申したり。（同上）

あぶない事

世には危ない事が多い、まづ脚氣脛の炮禄賣、高荷をつけたる馬の岸の細道つたふ、盲目の下り坂、わかき姑と聟と中のよき、やもめ男の嫁とむつまじきも若後家のしげき寺參りも此分といへば、粗忽なる坊主の聞て、まことと是はいづれも危ないものじや我々の寺へも若き後家の參らるゝが、あぶ。といふてやがて口をかゝへた。

（寛永版　きのふはけふの物語）

九分十分目の欲

さはるに煩悩目の欲、尊といい寺は門に馬立、玄關に使者男たえぬさる寺方に美目よき小姓ありけり、心やすき旦那參られて小僧をよびて。あの小姓はいづ方より抱へさせられた名は何といふぞと問ふ、小僧。あれは去る涙人衆の子でムる名は花崎作彌殿といひまするといふ、旦那きいて。さてもく〳〵ちょッとあるまい器量じや、おれが思ふやうならばあの子を女子にしてほしいといへば、小僧がいふやう。いづれ人の目は九分十分でムる沙汰はないとと長老樣もさやうにおしやりまするといふた。（元祿版　初音草紙大鑑）

はつ鰹かさ　正の無我で聞く
茶にされた元祖は四月八日也
極樂のみちを知らぬが佛なり
御詠歌のかな切聲が嫁いぢり
弘法は我身つれづて見ぬさ見え

白藏主

コリヤ治郎よ樋の口にこんな泥鼈が居た長太よこい〳〵庄六よこいたづら小僧呼びあつめて手々に四足押へるやら首に繩をかけるやらさいなむで居る所へ年頃四十餘と見えてサモ殊勝なる出家通りかゝツて。コレ〳〵子供かあいさうに生て居るものを殺生な事をしやんなどうぞ我に賣てたも放してやりたいドレ〳〵錢をと三十文ばかり出せば。〔子供〕めッさうな事いふ坊さんじやナア長太よすッぱんやへ賣ても百文程がものはあるわいイカニ此處が在所ぢやとて。〔出家〕ハテそのやうに言ふな地でも此くらひなは。（安永版　咄角力）

諺　古

逢摩の眼を灰汁で流ふ

佛の目をぬく

七日語れば尼が法師か

痩法師の酢ごのみ

佛法に飢渇なし

會下僧のかちかさ

惠心の作三尊佛の出みせ

二月十五日は涅槃像にて增上寺へ參詣多かりける、然るに去る俄道心者惠心御作とて途中に出みせをして口上高々と、何れも立寄せ御縁を結びたまへ是は惠心三尊佛にて御來迎の如來樣ぢやと申て歡進しけるに、面知己の中間男來りけるを幸の人が參られたりおん身少々の間此處に番をしてたまはれ我しきりに用事ありて一二町ある所へまゐりたしとて彼男をやとひ置き、坊主は用にぞ行ける、此男もなまなる口上をいふて一錢二錢づゝあつめける所へ無二無三の奴來り言葉をなまりて、是はなんだと問ふ、件の番の男、惠心三尊佛と答ふ。中に立て居るはなんだといふ。彼の番人も樣子くはしくは覺えず返答にこまりて。中に立せたまふは賴光佛はたは綱金時佛なりといふたも一笑。（元祿版　もらいぞくほ）

だいこく

檀那寺へまゐり玄關にて案内乞どもあいさつなきゆへ勝手へまはり覗き見れば和尚峭を料理して居る、見附られてはさぞ氣の毒がらるであらふと又玄關へまはり。たのみませうと大聲でいへばやうやう取次出て。まづ御上りと座敷へ通し和尚も出てあいさつあつて盃を出し二三杯のむ。〔和尚〕これは何もお肴がなしといふ。〔客〕和尚さまさう仰有りますなおたのしみを存じて居ります是ほどお心易いわたくしになぜお隱しなされます。〔和尚〕むゝ御覽じたか是非に及ばぬコレおふじお心安いお方じや出ておちかづきになりやれ。（安永版　島の町）

古諺

地獄にも知り人。

おちこほれは沙彌の物。

死人に妄語。　餓鬼の目水。

百萬遍

數珠を操りて居るところへわかきもの來りておまは一日に何遍ほど操せらるゝと問へばされば四五十萬遍もくるかと存ずる。さてさておどろき入たる事かなわたくしは和尚さまから一日五千遍づゝの所作をうけましたがなんとして大抵のことでは操れませぬ私におまへの早くりの法を御傳授なされて下されませと申す。やすい事でんじゆいたさうまづ數珠のおや玉を取てひたいにいたゞき南無阿彌陀佛と一心に一聲となへてあとは同く〳〵。（延享版　笑布袋）

常念佛

常念佛の坊主飯交代がおそいといふて大腹立のところへ代りの坊主來て。さて〳〵據ない用が出來たゆゑ遲くなつたと言譯をして坐りながら、かういそがしくては耐らぬどうぞ一日念佛を申さずに死にたい。（文政版　咄安寶）

物忘れ

長老客僧にむかひ。さて此ほどは久々貴僧も御上京の由。さやうでムります。何ぞめづらしい事はなかッかたな。殊の外めづらしい事がムりました。夫はいかやうな事ぢやぞ。十歳ばかりの子に十念を授けましたが辭世をよみました。夫はめづらしい不便なことであッたその歌は。アヽなんとやらいふ歌でムりました。お忘れなされたか。覺えて居ましたがトント忘れました。沙門の物を忘れて悟りの道がどうなるものぞチトおたしなみなされ貴僧のやうな人が釋尊のお弟子にもあッて其人の名をアヽなんとやら言ひましたワイ。（安永版　咄角力）

諺

槃特が愚痴も文殊の智慧

小智は菩提のさまたげ

比丘尼のはり小細

宗論

さる兩寺宗論ありて殊の外むづかしく或日兩寺の役僧屋根舟にてなにか小聲になり數刻密談あり船頭耳をすまして聞ば密談もすみての上。此度の儀おたがひに當役のこと是非に及ばす係り合候へ共さて〳〵氣の毒至極なる儀なにとぞ双方おんびんに相濟候やうにいたしたく第一御奉行中など御苦勞の段も畏れ多しなど、双方共に甚だうつくしき挨拶を船頭聞て我知らず横手をうち。お互ひに御憤りあるべき所さすがに御出家ほどありて立派なる御あいさつさて〳〵感じ入ました是が犬ならば嚙合ふところだ。（文政版　咄安寶）

古　諺

宗旨論どれが負けても釋迦の耻

どの道を行くも一つの花野かな　永機

禪僧の素麺。新發意太鼓。

法華の情別。比丘尼の鍵詣へ。

眞宗のあて字。

佛法あれば世法あり。

狩人

出家狩人に出合ひ。そなたは物の命を取て渡世とするはわるい了簡この世でそのやうに獸類をころせば來世でその通りころしたけだものと成り身を苦しめる、わるい事はすゝめぬ殺生を止められよとのたまへば。そんなら現世で狐をころせば來世で狐になりますか。いかにも狐に生れますといへば狩人なみだを流して怖ろしがりやがて鐵砲に口藥をこめかの出家を目がけ進みよれば出家色を變へ。これは迷惑どうなさるといへば。されば御異見にしたがひ來世のために貴僧を殺して坊主に生れかはります。（安永版　書名未詳）

古　諺

法華の情剛

法師の柳あつめ

布施なき教に袈裟おさす

鉦の念佛

貴僧の重れ齋

仁王

仁王へ紙をかみて吹つけると力が出るといふを聞き若い者二三人づれにてさそひ合ひある寺の金剛へめッたむせうに紙をふきつけしが一人が懐中をさがしながら。たッた今はながみを出すとてつひ金を一分おとしたといへばつれの者うろ〳〵あたりをたづねれば仁王も首をふりながら身躰中を見てきよろ〳〵。（未詳）

不動

ある家の亭主不動尊信心にて木像の不動尊を刻ませ厨子戸帳三ッ具足とおひ〳〵出來て御移徙として近所へ茶飯をくばると隣りの女房禮に來り。先ほどはありがとう存しますドレ拜むでまゐりませうと木像を拜して。大層お立派になりました先達てまでのやうに只棚の隅にあッた時とは違ひいろ〳〵お道具が出來ましたら格別にありがたみが見えますは馬士にも衣裳でムいます。（天保版　嬉圓舎）

閻魔

淺草のゑんま正月も十六日に雨がふり七月もふりで如何も仕方なく觀音へ金を借りに行きしに觀音あひたまひ。なるほど用達てもやらうが貴樣は返ず時どんな顔をさッしやる。（未詳）

大佛

京の大佛とんきうに及び嵯峨の釋伽へ無心にゆき。さてわれらつくづくと思ひまはすに尊公は躰が少さい、なれども人の用ひがムるわれは躰も大きいだけ入費倒れにて難義いたす近頃御無心ながら參物の溜りがあらば少〻貸て下さるまいか。それはお易い事さいわい茲に四文錢にて百貫文ほどムるから御用達申さう。早速の御承引千萬忝しと腰の巾着へ入れた。（同上）

目の色をかへて不動は名を弘め
仁王さま幕をひかせる御すがた
辻地藏山師なかまにだきこまれ

庵室

ある松原を通掛り、只見れば片ほとりの庵室に三十ばかりの男たゝ一人机にむかひ經を讀で居る躰に、旅人ア、あのやうにして暮した ら無念無想でさぞ心よい事であらうとうらやましう思へば、庵室の男ずッと出て伸をしながら、ア、金がほしい。（安永版　島の町）

常念佛さもいやさうな後生なり

既數の場でさへ愁のすはりごこ

擅那寺喰はせて置てさてさいふ

もう五年をそいと遠磨首ばかり

阿彌陀樣にくい婆アへつまはぢき

だだたのめとは物入りを思し召し

五阿彌陀にしてもらひたき腰ぢつき

懸垢はたえずうき世のさがの釋伽お身拭ひにもされる塵埃　行風

君臣門

さすがは

奢り大名に家老職の諫言もとゝかず、此上は鷹野をすゝめ百姓農作の躰を御目にかけんと、まんまと鷹野に出しが、かれて百姓に農作かまひなしとふれたれば常の如くはたらき居けるを、殿さまつくづく御覽なされて、さて舘へ歸りたまひしが家老を早速めされ。けふ鷹野に出ではじめて百姓のていたらくを見るに甚だ辛勞をなす事ぢやわれ是までの奢りは只先非をくゆるなりよく〳〵百姓が困窮するかしてけふも一吹の煙草を二人して喫むで居た。（安永版　嘶角力）

金屏で見れば軍さも面白し

忠臣は椽と橋との下に住み

國家老落し咄のおちをほり

鶉

うづら好せたまふお大名あり。承りつたへ聞にまゐる者へは御料理など下され甚悦せたまふよし、お出入の宗匠衆をたのみ。わたくしもきつい鶉好きと申入て曉起して行つたところさすがお大名の御手のまはりたこと、朝からいろ〳〵のうまごと酒たらふく下されのみくらひして居るうち、チヽツクワイとの一聲肝をつぶして。あれは何でござります。（明和版 鹿の子餅）

御髭

御大名御髭を剃らせたまふときお舌でお鼻の下やお頬べたをふくらませたまふ。なんとおれが髭を剃るとき舌をまいてはたらかせふくらませるで剃りよくはないかとの御意。イヤハヤ格別仕りやうムります。その筈是はおれの工夫じゃ。（同上）

梅松櫻

去る大名姫君を御一門方へ御輿入あつてはや御懐胎にて臨月なれば初産の事ゆへ首尾よく達者になるやうにと諸寺諸山への御祈禱親殿様御心もやすからず折節馬上にて使者馳來り。只今姫君さま御産の氣がつき給ふとの早打來る、下々とちがふて走つても行れず大殿は火の見へ上つて遠眼鏡にて御覽あるところへ又馬乘にて只今玉のやうなる若君様御誕生との注進。それは目出度〳〵と御よろこびの中へ又々馬乘にて御誕生との知らせ。フム扨は双子かまア〳〵母子共達者で目出度〳〵との舌も引せられぬ所へ又々若殿様御誕生との早打、大殿おどろきながら遠目鏡をおやに搆へ。もう止ればよいが。（腑が茶）

おさまで馬も早目の御注進
御安産蓋邊をさして田鶴の聲
お目出度さ武藏が二ッ用に立ち

疊　誓

御倹約の殿様が疊がへいたすやうとの仰つけ、それも汚れざるは其まゝにさし置けとの御意に御家老が。思れながら御疊ぬき〳〵取替ましては石疊のやうになりまして見苦しうムりませう。そんなら汚れざるは裏返したがよい。しかしながら武士の家にうらがへると申事は嫌ひまする。その疊はいかほどある。凡八百疊ほどムります。千疊におよばねばうらがへるとも苦しうない。（文政版　咄安覽）

遠眼鏡

御物見から遠めがねのおたのしみ。あれなる塔はいづくじや。ハイ観音でムります、こちらの鳥居が三圍の稲荷この通を御覽じませ三又の新地でムります。殿よく〳〵御覽最中うつくしい娘と行平ともいひさうな若ものがひたりと行合ひなにやら懇話の躰殿様たまりかね遠めかねへ耳をおしつける。（同上）

葡萄棚

ふだん御側の役人の女房にまかされて居る男あり、ある時女房にしたゝかくらはされ顔に大きな疵をつけられ番に出ければ殿様御覽じ大かた女房にぶたれたものと思し召し。其方の疵はなんぢや。ハイ此疵は御庭の葡萄棚がたをれかゝりましてこのやうにいたしまして厶ります。アハヽ僞りをいふやつぢや屹度女房にたゝかれたであらう女房をよびにやれと外の役人へ仰せ付られけるを奥様襖のあちらにてフトお聞なされ殿様の御聲で女房を呼びにやれとは妬ましやと日ころ大やきもちの奥様大聲をあげて。うらめしやと言ひながら奥から走り出たまへば殿様肝をつぶし。これ〳〵予が所の葡萄棚も大たをれだ。（明和版　十千萬兩）

奥様もよろこびありや鈴の音
なまめいた院號のある下屋敷

火事

さる國の殿様お屋敷近く火もえ出で御居間へうつる騒ぎ、殿様うまれてから初めての類焼に大うろたへにてやう〳〵御下館へ御立退なされ、翌日みな〳〵を召し集められ仰せ出されけるやうは。此後火事法度。（嵐方棚）

お月見

今宵は十五夜、觀月の御宴にて御機嫌うるはしく。よいお月様ぢやとの仰せ、家老申すやうは。畏れながらお月様などゝ申すは婦女子の申す言葉にムれば何卒御無用に願はほしう存じますとの諫言、殿様感じたまひ。よく申したト又空をうち仰ぎたまひ。ア、星めらも出たか。（米詳）

殿の犬には喰れ損。御扶持の無力。逃げ奉公身の敵。
主の前とすべり道は早く通る。神より君。（以上古諺）

國家老

國家老はじめて江戸屋敷へまかり出で殿樣へ御目見えの時御意には小兒がわらふほどに近ふよつてあやして見いとの仰せ。ハヽツと治部右衛門おそれ入り平伏す、近習の衆氣の毒がり。御意でムるおあやしなされませといふ治部右衛門やう〳〵顏をあげ。ハヽ畏れながらバアー。（座敷話）

馬嫌ひ

遠乘の御供を仕れとたび〳〵の御意この度はさう〳〵虛病もかまへられず是非なく乘て出るやいなや此馬物に驚いてむせうに駈出す久平死身になつて鞍壺へかぢり附てゆくむかふへ知己の男來かゝり馬の上へ聲をかけて。これは久平どの何方へお出でなされます。されば此分では何方へ行うも知れませぬ。（氣の樂）

親子門

鉢の木

おやぢ息子がうたひを聞て。コレわが謠ひは帆をあげてといふところがよくないな。お父さんはなんにも知らぬくせにヤレうたひやうがはやいノおそいノといふけれども師匠さまで習つた通りにうたふのに。ナニおれが知らぬ事があるものかなんでも知て居るワエ。そんなら今日ならつて來た謠ひをあてゝ見なされ。ムゝうたつて見ろ。いでそのときの鉢の木は梅さくら松にてありしよなさァこれは何でムいます。知れたこと菅原だ。（文政版　お伽話）

惣領は尺八を吹く面に出來

印籠

息子印籠をひろひ。モシ親仁さま今日よい印籠を拾ひましたと見せる親父見て。蒔繪も其が昔おらが拾た時分より悪くなッた。

（文政版　噺安寶）

朝寝ぼう

ある人息子を呵る。もう起ないか、かゝァふんばいておこしやれそのやうに朝寝をして祿なものにはなるまいッヒに早くおきた事がないモウ何時だとおもふおッつけ四ッまへだワ早くおきろ、いつでもくおれと一所にばかり起きたる。（安永版　雅獅子）

生酔

おやぢ酒に酔て歸り。コリヤ孫六よおのれが頭は三ッあるそんなものにこの家はゆづられぬ。同くむすこも酔て居て。なんのこッたこんな回る家をどうするもんだ。（天明版　ふくら雀）

息子洗耳

いくつになッても子を思ふ親心とて實躰なる子はもしや病ひでも出でなんかと思ふにつれて商ひに精を出すばかりで世間知らずと笑はれんも如何せい出して置てそのひまくに友達とも誘ひ合て錢も少しは遣はふがよいと、遊所へ行けといはんばかりの親の言葉に、息子大いに立腹して。この儲けにくい時節にあそびに行けとて親父の異見、茶屋と聞もけがらはしいとてやがて川端へ下りて耳を洗ふを隣りの息子見つけて。又兵衛さんなにをするぞ。イヤかくくの譯にて茶屋へゆけといはぬばかり餘りに耳がけがれたゆへ洗ふのぢやと聞てとなりの息子物をもいはず宅へ歸り土瓶を下て來り少し下流へまはッてその水を汲でわがるを。コレ其水くむで何にするぞ。他でもない我家の親父にのますのぢや。（安永版　咄角力）

どらむすこ

若いときにはある事ぢやと用捨して置けば方圖がないと、おもての小座敷へ追ひこみ次の間におやぢが居るゆへ夜でも晝でも外出がならず息子こまりはて格子からの通りを見て居るところへ草履取の友助が覗いて。若旦那さぞ御窮屈でムりませう。チヽ友助か察してくりやれどうぞ今夜はぬけて出る工面はあるまいか。ハイゆふべおいらんからも文がまゐりました是を御覽なされませ何かの事は私が今晩四ツ過に咳ばらいをいたします此格子を一本ぬいて置きますからそつと脱てお出でなされませといひふくめ時刻になりければ約束の咳ばらひ息子よろこび首をさし出し身躰は半分出かゝりしが帶がひつかゝり腰をいため逆におちるを友助いだきおろしお怪我はムりませぬかといへばむすこ。さて〳〵苦しいものだ是を思へばお母はおれをよく產んだぞ。（寛政版　言葉の花）

軒の燕

物領息子の伊勢參宮きげんよう立つた跡にてまづ〳〵目出たいと家内うちよりて酒盛、親父も少しほろ醉きげんにて。ヤレ〳〵今日は日和もよし若いもの同士道中もおもしろかろほんに大事のかしま立ちやによつて一寸氏神樣へ參つてかうかいノ、（女房）おまゐりなされて道中達者なやうに願んでおいでなされと扇はな紙手わたしすれば羽織ひつかけて氏神へ參り拍手トン〳〵。今日怜がかしま立でムります何卒道中無難に參詣いたし水のかはりにあてられぬやう手足も息才で下向いたしますやうに守らせたまへ〳〵とくりかへし〳〵願んで小宮も殘らず拜して鳥居をづッと出かけると向ふに何やら大勢の人聲に親父その音きいてまた宮へ立もどり拍手トン〳〵。どうぞ喧嘩もいたしませぬやうに。（新萬歳）

どら息子

ある家の一人息子親父のきわいには似ず無性に金をつかい吉原の契情に夜具の敷初めをした上に籠甲の櫛を買て今宵持て行くつもり例の朝寐で貌を洗ひに臺所の井戸端へ下りつい辻つて袂の櫛を井戸へおとせしがそれとも言れず見世へ來て。これ〳〵たれぞ一兩だ井戸へおとした櫛をとつてくれろ〳〵とせいていへば側から番頭。あまりお聲が大きうございます奥へ聞へましたら大事でムりませう。ナニ聞えても大事ない、ハテさうではムりませぬ。なぜ〳〵。ヘイ大旦那がとらうとおつしやいます。（寛政版　喜美談語）

親父よりさきへ見限るたいこ持
ためたがる遣ひたかるで不斷もめ
通言はおやゞのみゝに逆ふなり
銀煙管銀のやうだとおやぢ買ひ
羽二重なべんべら物と親父いひ

同

おのれのやうな祿でなしに此身代がゆづられぬ今月もてうど十兩ばかり穴をあけむつたにくいやつめとの强意見。ハテさうおもふならゆづる時さし引がいゝ。（弘化版　寄合噺）

子を捨る敵へむすこは金をすて
息子の願ンなにさぞ鍵をおん授け
しつくした異見位牌を母は出し
腹のいたまぬ子を持と氣が痛み
糸卷に母がむかしのひいきの名
母の名は親父の腕にしなびて居
三浦屋のある細見をおやぢ持ち
わび言へ親父煙管を出して見せ
おッかない顔で親父は土手を行き

二十四孝

親に不孝な息子あり友達より合ひ異見して。おぬしはなぜあのやうに親に世話をやかせなさる昔は二十四孝といふて寒の内竹の子を堀出し氷の中より鯉を捕て親の望みに叶へた人もあるにといはれ。なるほど〻感心し宅へ歸り。お母さん筍をたべなさるかといへば母肝をつぶしこの寒の内に筍がどうして喰られるものかね。そんなら鯉を喰なさい。〔母〕おぬしが夫ほどに思ふなら甘酒が一杯のみたいト、いへば。〔息子〕ハテ相憎だが二十四孝に甘酒はない。（安永版　初登り）

孝はなで不孝はかぢる親のすれ
孝行のしたい時分におやはなし
今川は父百人首母数へ

子を持て知るとはをそい思つき
叩かれて痛くないとて悲しがり
箸紙に父母の名わかき三つの朝
かゞまつた腰でも親は飾り海老
さればとて石に蒲團も若せられず

異見

兄弟二人を呼び親のいふやうは。惣領はほかにいひぶんはなけれど兎角人の衣類かみ入きせるなにを見ても直打をするがわるい癖ぢやずゐぶん氣をつけたがよい側で聞て居ても氣の毒なものぢやまた弟は地口とやらが好でおもき人の前にても憚らず又は大事の相談のなかへも地口をいふわるい癖かならず二人共以來氣をつけたがよいと異見すれば惣領は手をつき。ありがたい御教訓たとへにも御異見五兩勘忍十兩と申ますれど此御異見はどうやすく積つても三百兩がものは厶りますと直にくせのぬうちをいへば弟もこらへかねて。兄さんいけんの金に三百兩は宜い。（文政版　御伽話）

ごく無理な異見魂しひ入れ替ろ
親の氣になれとは無理な叱やう

親と子の話し和らぐ蒲團かな　青芝
子や暗りけん隱れ家の伊達蒲團　寶馬

うし

みいやおまんまをいたゞいて直ぐ寐ると牛になりますよ。あたい牛になりたいわ。おやまアなぜ。お祭りに行るもの。（今人　茶道庵作）

大根

名古屋の小學校へ用ありて行しにてうど授業時間にて教員が一生徒にむかひ。當地で名高い農産物はなんです。ハイ大根でムいます。その大根は何方で出來ます。ハイ隣りの八百屋で出來ます。（今人　芳塘作）

子に利いた良藥母の腹も治し
是程におやはおもふぞ千歳飴
藥の苦せない親父は喧嘩の苦
子心にはやく寢たがる寶ふれ
花火をもらひ日かくれろ〳〵
洗濯に井戸なかへほす鬼子母神
よく寢れば寢るさてのぞくまくら蚊帳

（參觀）夫婦門—出産

武士門

牛が賣れぬ

さる浪人武具馬具までも喰てしまひ業のために子供を寄て手跡の指南、子の龜松も成人せばよき武士奉公させんものと夫を樂み暮し居けり、或時何方へかの使者と見えて歴々の武士馬上にて供廻りも美美敷きらびやかに打過るを龜松はうしろかけ羨しさうに見送りければ父親これを見て、龜松もあのやうな武士になりたいか。アイ。なりたくばずゐぶん親に孝行するとあんな武士になりますぞといへばハヽアそんならおまへも不孝であつたの。（安永版　嘶献立）

弓矢の禮義（古諺）

流石にわれも平家（同上）

介錯

ある武士野邊を通りけるに松蔭に一人の武士もろ肌ぬいで坐を組居たりしがかの武士を呼かけ。御侍と見かけおたのみ申度義ありと近くへ招き。さそれがし事一分立がたきことありて只今切腹仕るなり御世話ながら介錯なされて下されいといふ。武士聞てハット思ひしがひかれもせず。なるほど介錯はして進ぜやうが必御他言なさるゝな。

（未詳）

武士の嗜

ハイホウ〳〵脇へよれ〳〵といふ所を聞ぬふりで供を割るゆへ若黨が捕へて突戻せば悪口するゆへ。もう堪忍がと拔放す若黨の刀が赤鏘ゆへ、且那が見附て。平生の嗜がわるいから耻をかくドレ鎗をと取て扱た所が同く眞赤。コレ見ろ皆でもこの通だ。（蝶夫婦）

いかい田分

僻としていかい田分〳〵といふ武士ありれき〳〵ならび居る中へ家老どの出られ何か咄しありてをかしき事いはれたれば例の僻。いかい田分といひければ、家老どのやゝ立腹して立れける、朋輩共さてそなたは日比の僻のいかい田分をいふたによつて御家老不機嫌にて立れたり向後嗜なみたまへといはれ。我ながらいかい田分の。

（延享版　笑布袋）

雪見とて出るや武士の馬に鞍　木瓜
ものゝふの鎧をはらふ柳かな　霞江
武士の世とてや松に梅のはな　詠歸
人は武士なぜ傾城にいやがられ
馬の行く方へ乘てくにはか武士
百年目矢來のうちへ入れられる

井戸がへ

ある浪人長家の井戸浚があるゆへ附き合にてよんどころなく出ければ長家の者も氣の毒がり。そんならあなたは骨の折ぬやう綱の先を持て引なさるが宜いといひければ。それは忝うムると綱へとりつく井戸の中にて。引たりよといへば。〔浪人〕どなたもお先へ參じます。（百喇り）

町人で質屋を出るひどい事
藏宿を出る玉おちの定九郎

流石は

大臆病なる武士夜る厠へゆくに氣味わるくおもひ内儀に手燭をかゝげさせゆきしが厠のうちより。なんとそなたは怖くはないかといふなんのまア怖いことがムりませうといへば。流石は武士の妻ほどある。（福德噺）

臆病武者のしれかへり（古諺）

醫師門

醫者の自慢

ある醫者つね〳〵手柄自慢をせられ死したる人を再び活し世間の醫者共が手におへざる難病を只一服にて快氣させたなんど〻自慢せられける、此醫者と日比心易き人のいふは。毎もお話しのやうならば御手柄ばかりなりナンと是まで比さきにて殺したまふ事はなかりしやといへば彼醫者いはるゝは身共が殺した事は先の病家ではなしがムるゆへおれがいふには及びませぬといはれた。（輕口浮瓢箪）

高運は藪から棒も長くなり
大道で脈を見て居る小兒醫者
一思案ありと藪醫者こわい事
現在の親のかたきに五分疝

流行醫者

はやり病に流行醫者別していそがしく此頃は代脉が十四五人出れどもなか〳〵手が廻らす無據玄關番の若黨を早拵への醫者にして乘物へ入れ病家へ回らせけるが乘馴ぬ四枚肩にゆられて乘物の中に居眠をして行く内病家に至り草履取先へ。物申といへばびっくり目が覺め駕籠の中から。どうれ。（文政版　江戸繁榮）

針醫

癖がおこり針醫を呼び鍼を立てもらひしに其鍼ぬけずして病人ことの外いたむゆへ扱て下されといふいろ〳〵手を盡せどもぬけず鍼醫しかたなく飯椀を出さッしやれと言てやがて其食椀を鍼の上へかぶせ帶をしめさせ。サァ立ッしやれといへば。（病人）ぬけますか。サァおれが鍼の師匠の所へあゆばッしやれ。（安永版　初登り）

藪醫

下手な醫師どの急病人あッてかけ出すとて隣の小娘を蹴とばしたればその母とんで出でいかに急用なればとて人の大事の子を蹴ちらし此樣に顏に疵をつけてとわめきければ大家どの割に入り。相長屋の事なれば堪忍したがよい殊に足で蹴られたばかりヒョット此人の手にかゝッて見たがよい生た者は一人もない。（安永版　初登り）

急病

九ッ過の寐入ばな、トンン〳〵。誰じや。ハイ伊勢屋から御新造さまがお癇で目をとりつめました急に〳〵。大切の病家只今直にと羽織ひッかけ走り行きずッと這入れば家内は上を下へとさわぐ醫者さま寐起のうろたへ眼で行なりに下女の手を取て脈を見るに。ア、申し私ではムりませぬ。ハテこんな時に誰彼の差別はないてや。（梅屋敷）

麁相

急病家へゆくとてある醫師脇差をとりちがへ擂子木をさして行きけるゆへ病家先にて笑ひけるゆへ面目をうしなひ暇乞もそこ〳〵にしてはやく我家へ立かへり女房を叱らんとて間違てとなりへはいり。おのれ憎いやつ滿座の中にて耻をあたへた不屆ものめと、叱りつくれば。これはまたり何を仰有りますといふを見れば隣りの女房。これはと我家へとんで歸り女房の前に手をついて。只今は麁相申しました。（文政版　お伽話）

接骨醫

おちにさと語るを聞て骨接ぎの　貼る膏藥も女郎花いろ　靜丸

直らぬか　日毎に通ふ骨つきの　直すにもまた骨や折らむ　美島

入齒師

なりはひに　念を入齒の上細工　妻子の目もうまくはめなむ　早田

疾病門

眼病

伊勢屋のおやかたが眼病とかでムると聞て臺所までゆき。承れば旦那樣が御眼病ちやげにムりますが如何でござりますといへば奥より旦那が紅のきれにて目を押へて出られ。ヲヽ、助七かよう來やッた。ヘイ御眼病のお見舞にめいりやしたヤァ旦那あなたのお目はどうなされやした。（未詳）

醫師觀梅

あかみさす　つぼみを星と眼科醫師　見るはかすみしおぼろ夜の梅　文の屋

はるさめの　糸脈とりて鉢うゑの　枯木のうめも　見なほした醫師　星の屋

看病

どうた八てめへ大分あんばいがわるいさうだ一人でさびしからうと思ッて言合せて今霄は看病に來たなんぞ喰てへものはねへか何でも望むだが宜いこしらへてやらう。やァ友達といふものァありがてへもんだ三人共とまッてくれるのが。チヽサその積りだ藥でも白湯でものみたかァさういふが宜いと霄のうちはにぎやかに酒など飲で居たりけるが夜更てはころ〳〵とみな寢てしまふ、病人目をさまして茶でも湯でもひとつくんなと起せどもおきず詮方なく病人這ひ出れば一人目をさまして。チヽ八なんだ。ウヽ茶がのみてへからと火鉢のそばへ這ひよれば。ついでにおれにも汲でくれやれ。

（一九作　書名未詳）

次の間て聾が藥を煎じて居
其實さ掛卷きで奈を盜取り

氣狂ひ

年中いなかばかりあるいて居る山井養仙といふ藪醫師ある百姓のところへ來り。そなたの息子が氣がちがッて居るといふ事ちやによッて尋ねて來ました藥を進ぜませうといへば。ハイ〳〵思召は忝うムるがァア直りました。ソレヽ仕合せ一躰どういふ氣狂ひでムッたなハイこの正月ふと暦を汚しまして急に萬歳のまねを志ましたそれから二月になると狐のまね三月になるとお雛さまのまね四月になるとお釋迦さまのまねなんぞしましたが今月五月になりましたらとんと正氣になりましたト話せば。ァヽいヽ時直ッた來月まで持越すとよい〳〵になるところだ。（可樂作　種がしま）

氣ちがひの力と食は二人前
此通り氣は慥だと氣が遠ひ
物狂ひ水なこぼさず（古醉）

聲の出る藥

聲の出る藥には蛞蝓をのむと可が腹にあたるとわるいから後で蛙をのむ、蛙がのこれば雉子をのむ、雉子がのこれば狐をのむ、狐がのこれば獵人をのむ、獵人がのこれば庄屋をのむ、庄屋がのこれば今度は鬼をのむ、そこで腹の中で鬼があれるとわるいから鬼ころしの酒を一合のむが宜い。ところが私は下戸でムりやす。ムゝそんなら煎豆。（五返舍作昔話し）

稻妻やくすり休みし宵のそち　蒼虬
朝起きは人のくすりよ稻の露　雨林
どの草が藥になるぞあきの蝶　菊角

神農の腹下ッたりけッしたり
急病に憑日なし（古諺）

貧精門

貧乏神

ことしはめづらしう回向院でびんぼう神の開帳があるとの事方々へ札が出て居る讀で見たれば。御參詣無之御方へは此方より御見舞申候。（明和版　鹿の子餅）

裸

寒中はだかといふ不始末人目にかゝらぬやうにと二階へ上り寐ころんで見てもさむくッてたまらず。かゝァや何ぞかける物はないかといへば、下より。アイそこらに折釘がありませう。（梅やしき）

たッた二度着たと女房愚痴を言ひ

涙人

雨のふる日は眞の涙人と來て晴間まつ張肘の門口おあまり貰ひが立て。おあまり下さりませう。涙人くすみかへッて。あまらぬ。

（明和版　鹿の餅子）

同

裡店へ引越して來た涙人世帶道具はさつぱりとなく一ッ竈と飯たくほうろく一ッばかり見舞に來る者へ何もないをきつい自慢。惣躰武士なるもの衣類諸道具持たぬものでムるつね自由すぎるとさァ軍といふた時身が倦むで困むそこでわれらは何も持たぬです。それは聞へましたがこの上り口の大石は蹈石とも見えませぬ何でムります。夫かそれは寒い時持上るのじや。（同上）

登家牡丹

たしなみの　鐵草こそ咲きにけり　常世が貧にたくふ宿とて
富貴草見ながら喰へる麥飯も　まづしとは身に思はざりけり

桃の屋
檜馬屋

同

涙人米屋よりたん〳〵の代金たまりつひに大晦日といふ鍔際に到りしかは催促の來ぬうちにと、しほ〳〵として米屋にいたり物をもいはず諸肌ぬぎ脇差を腹へつき立んとなすゆへ亭主驚き。まァ〳〵お待なされませ如何いふ譯でムりますト刀をもぎとれば涙人はら〳〵と涙を流し。今まで露命をつなぎしは言ずとしれし貴殿の大恩、トあッて拂はん金はなし申譯の此切腹止めずと殺して下されましと思ひ入たるありさまに亭主感心し。いやもうさういふ思召なら金子はいつでもようムりますァ、御涙人なされくも流石にお武家、まァそのやうにくよ〳〵思召さずと御酒でもあがッてムりませトいへば。いへ〳〵左樣いたしては居られませぬまだ方々へ腹を切に廻らねばなりませぬ。（文政版　生鰹船）

同

浪人米屋へ來り。なんと上白があるか。へイよろしいのがムります相場は。兩に八斗いたします。それが極よいのか。へイ上なしでムります。それなら冷飯を出しやれチト利て見よう。（未詳）

内職に　琴の糸よる賤が家の　牡丹はやはり　花のふき組　よこすき
庭面の牡丹に富は見ゆれども二十日のかてもあらぬ賤が屋　塵山人
まづしくも睦める宿は人の見ていとうつくしきこの富貴草　月摩呂
疏食はみ　水をのみても樂しみはふかみ草さく賤が庭もせ　不二の屋
賤が家に　今をさかりの富貴草月の三十日を知らで越らむ　菊の屋
平家には　あらぬ伏屋の富貴草是や二十日の榮花なるらむ　都一座

貧者かなひ難し。（古諺）

火の降るは水につかった報ひなり

富貴門

日雇

金持の旦那夏のあつさによはりどうぞ手早に下やしきのうちへ堀をほり入れて水の流るゝやうなしやうはないかと大工日雇をあつめて相談するにいづれ水はどこからなりとも引やうはあれど堀をほるに三十日かそこらはかゝるとのことと夫では急な間に合ぬといろ〳〵工夫するうちひとりの日雇が。モシ〳〵よい思案がムります世間の古井戸を買ひ集めて接ぎ合したら如何でムりませう。（未詳）

金は持ッたが手紙をかいたざま
金持を見くびッて行くはつ松魚

蜜柑

分限な者の息子照りつゞく暑にあたり大患ひ、なんでも食事すゝまねば打寝て。なにぞ望みはないかとの苦勞がり。なんにも食べたうないそのうち、ひいやりと蜜柑なら喰たいとの好み。安いことゝ買ひにやれど六月の事なればいかなことなし爰に須田町にたッた一ッあり一ッで千兩一文ぶッかいても賣らず元より大身代のことなればそれでもよいとて千兩に買ひ。さァあがれと出せば息子うれしがり枕かるく起上り皮をむいた所が十袋ありにこ〳〵と七袋くひ。いやもう美味うてどうもいへぬこれはお母さまへあげてたもとのこる三袋手代に渡せば手代その三袋を受取て欠落。（明和版　鹿の子餅）

分限者音曲

武家方に　お出入しても町人は　やりもいらずに　當る浮るり　柳下亭　囀雀
分限者は　なまりけもなく金銀と　ともにまはして　謡ふ妙音　同

福鼠

甲子の夜鼠が一疋來りしが、見て居る内に十二疋子を産む、その十二疋がまた十二疋づゝ産とだん〳〵産で二三千疋になると外へ出で行しがしばらく過て大きな鼠は大判を啣て來る、中鼠は小判小鼠は小粒をくはへて來る、後には千兩箱を車に積で鼠が引て來る、だんだん家内中に一杯ゆへ坐る所がなく二階へ上ると又二階へも居られぬほど金を運ぶ、戸を明て庇へ出やうとすると庇へも一杯金が積である、こいつはたまらぬトやう〳〵大家根へ逃出てほッと息を吐て居る間に出る事のならぬやうに金を並べ下を見れば大勢の鼠が車で金を積で來るに。是は耐らぬ寶船〳〵。（寛政版　開卷百笑）

むだつかひ　せで貯へよ銅錢の　五厘もつめば　塔や建らし　五町庵通里
ものいはぬ　山吹色の金貨さへ積ればうなるためしありさか　雅の屋
長者の腔に味噌。（古諺）

鶴　龜

こゝに六十一本卦歸りの上の人たちさる大家のゑびす講に招かれ大勢寄合ひ。ときに福徳屋のお爺さんはお幾才へ。わしはまだ八十さ。松屋のおぢいさんは。おれは八十八よ。竹屋のおぢいさんはへ。たッた九十九サ。それハいゝお歳だトはなしの後ろに。アハ、孫や彦が何をいふはトいふゆへ振かへッて見ればかけ物の鶴と龜。

（光齋作話の山々）

初老賀　年わすれけふ白髮の仲間入　曉臺
五十賀　噂せば桃に王母の影さゝむ　同
還暦賀　老松や又あらためていく霞　一茶
古稀賀　許されし杖も頼まず尙齒會　稚簫
八十賀　長みどり松より見れば童哉　閑更
米寿賀　稻かけて風も引ざし老の松　蕪村
九十賀　菊の香も馴れば久し九十月　露谷
百歳賀　俵子の十つゝ十なよむ春か　みち彦

商估門

夜光の珠

きつい繁昌な商人店へ隱居らしき人。これは〳〵御精が出ますな御店はきつうおこと多いと見える。ホ、御隱居さまようお出なされましたハイお庇で相應にいそがしうムります。夫はまア結構な事御普請も出來るし手代衆はかたしお若いに器量ものぢやア、お目出度事じや。ハイ是と申すも親共が何も角もいたして置れましたゆへ只今でハ何くらからず暮します。それこそ眞に親の光りぢや。（噺萬歳）

紅屋

つはくらの出入もまして朝日影さしこむ軒のあかき紅見世　雛園美島

人形屋

人形屋の見世に義經辨慶關羽と三ツの人形ならび居て辨慶關羽にむかひ。コレ關羽どのこゝにムるおらが親分九郎ハ官義經君はやしま壇の浦の戰に大船八艘を一度に飛越されて今の世まで義經八艘飛びと言て子供の口にも唄はるゝがナント唐にはかういふ豪傑はムるまいトいへば關羽。エヘン唐土にはまだおそろしいがありやすよ。ハテどんなのがト聞ば。サレバ神農を聞ッし百草をなめた男だ。（同上）

瀬戸物屋あたり近所へ損が知れ
煙草屋は見本に玉へきづをつけ
勝立てをするは槌屋のまけ支度
賣れる程飴屋は顔をふくらせる
書くさこを見て塗ッたと地紙賣

紙屋

〔奉書〕時にちと地口をいはふではないか其ため奉書左様。〔唐紙〕こいつハ面白いまづ一つ言ひやせう、たうし〳〵あわゝはだうだ子。〔みの紙〕みのと大みの寢物語はよかろう。〔小菊〕こぎく萬苦のくのせかいはだうだ。〔うへだ〕うへだ通れば二階からまぬくだ。〔小半紙〕チット小ばんし柿や九年母サ。〔西の内〕ハヽァそんな酒落は西の内へさらり〳〵だ。〔まき紙〕富士の卷紙もふるいから、手紙のお役に立ッたはやいは如何だ。それは中々。ちうな筈だ鼠半切だもの。（文政版　商賣百物語）

あめりかの　桑の港に旅寢して　羅のたれもひさく商人　不間亭
明けたる世は骨折ずあめりかやふらんすさして渡る傘商　都柳軒
商人はまうけを前にしらま弓いたりやさして船渡りしつ　蹇の屋

電話

洋服の　見本おこせと呼りんの　ぼたんを押て　かけろ電話機　丁子園

質屋

わかい者質屋の番頭にむかひ。おめへのところではいゝ利足をとって金がずん〳〵子を生でゆくからおッつけ金の置所があるめへ。ナニサさうずん〳〵生れるものか中途で流れて仕舞ふやつが澤山で八月ともこたへるのはありやせん。イヤさうは言はせねへ毎日生れる證據がありやす。ハテなんのせうこがあるね。サレバいつでもまちやだ〳〵といひやす。（同上）

只置きの盲蛇多きは品すくなし心をさせて質屋は繩をかけ
二八月質屋の蔵もあれるなり
御代の鎧に置き主の袖下るし
質ぐさは殺されてから縛られる
金銀のひでりに質はおし流れ
黙ならで忍ぶ質屋の戸口かな　蕉芳

古道具みせ

古道具ばかりでは合ぬとて餅をついて賣る五文どりを出し置ければとへうもの來りて。この餅はいくらでムるといふ。それはきはまッた五文どりでムる。これを三文にまけさッしやれ。ハテきはまッた五文どりをまける事はムらぬ。ぜひ三文にまけさッしやれ五文なれば新らしい餅を買ひますは。（同上）

夕立賣

夕立や〳〵と賣て通る、これはめづらしい商人じやと言て居るト向ふの娘が。もし〳〵夕立を三文下さい。これはあんまり少ない何になされます。稗蒔へかけてやります。（未詳）

秋の夜に　ちまたをひさく　枝豆の　さやけき聲ぞ　さびしかりける　柳の屋
身にまさふ　つゝれにかへて　八千草の　錦をひさく　あきの花うり　都一庵
秋もまた　のこるあつさに　かつきたる　重荷に汗を　かきやたる柿　東海園
枝柿の　へたにはあらぬ　賣りやうは　胡蝶もたッぷり　見せし口前　何の屋

八百屋

かみさん大根を一本くだされ。大根はムりませぬと切口上でいふ亭主奥より出で。コレおまへは今まで御屋敷につとめたから商ひのしやうをしらぬは尤もぢやが賣切ッた物なればそれはムりませぬがこれではお間に合ひますまいかといへばそれについて外の物も賣ることがある挨拶がかんじんじや。アイずあぶん心得ましたといふ所へ。かみさん長芋を下さい。ハイ長芋はきれましたがつくね芋では如何でムります。長芋がなくばつく芋で間に合せませうと買てゆく又かど口へ、モシ山葵おくださいといふて來る。ハイ山葵はきれましたが生姜ではどうでムります。ム、生姜ではちとかゆひがせうことがない間に合ひにして置けとこれも買て行く亭主。それ見やれ人に無理はない物のいひやうで買て行くわサいつでもさう氣をきかせたが

いゝと言ふ所へ。モシかみさん布海苔を一枚くんなさいといへば。ハイ布海苔はきれましたがたゝみ鰯では如何でムります。

（寛政版　貫菜の花）

長い刀

ある武士道具屋へ來りむしやうに長い刀があらばほしいといへばアイずあぶんムりましたが今しがた外樣へ見せに遣はしましたまことに殘念なもちッと前まで鐺が見えましたに。（未詳）

世渡りや花に來て賣る風車

〔俚諺〕賣出し三年。鹽を賣ッても手を嘗る。

湯屋

「カヴ權さん湯屋のはなしを聞たか。まだ聞ねへ。よほど奇説だマァかういふ話しよあすこの湯屋は男湯と女湯と夫婦だらうソコデがうせい中がいゝから子桶もよそよりは澤山出來たといふものだ、ところが一日三助めスコお神酒のかげんでむてきに女湯へたきつけたものだから女湯がゲット熱くなッて夫婦喧嘩をはじめやしたがあまり熱くなッたから誰も中へはいり人がなからうそこでおれが一番とガット裸躰になッて中へはいッて見た所がさッぱり熱くないから不思議におもッたら其筈でもあらうかいそばから三助め水をさして居る。

（寛政版　冒頭の花）

婚姻門

戀の道

七十に近き姥あり、似合たるものゝ方へ嫁入をする、孫なる童、牛にのせて行く、道にさはる荷物のあるを見て、孫牛に聲をかけ、除て通れといひけり、姥これを聞き、そふて通れといはんこそ本意ならめ、のいては不吉なり、いや〳〵けふは行くまいと、よめ入をやめけるも興あり。（萬治版　醒醒笑）

誰をかもなかうさにせむ高砂の松もむかしの茶のみ友たち　菊山人

目にはさやかに見へれ共耻かしさ
持ちなさい女はのちにふけるもの
いひなつけ互ひちかひに風な引き
のち〳〵はと言ふ内はやこれ〳〵
白鷺の黛濃になる夜のばづかしさ
よめ聟なされはむこあられなさり

仲人

コウ唐土では仲人の事を月下氷人といふとよ。そこで日本なら高砂やアとやる時には。月落烏啼て霜天に滿つと吟るのさ。エ、ッどこまで寒がらせアがるトコロでお開きといふ時には。みんなを室へ入れる。（今人常盤銀成作）

釣臺で娘に錠をおろふに來
小諦を急に四五番のみ込せ
隣りへはまづ觀音と言て置
仲人のそら綿もなき無疵者
嫁の年拾錢ほどの唖をつき
仲人は雨まで ほめて開く山
四百づゝ兩方へ寶る仲人口
行燈へうつして仲人喝ひ
相惚れの仲人實はまはし者

春の花むこ

こゝに梅の仙人と名づけたる古木庭のすみの姫百合を見そめ紅葉さんを仲人にたのみ金錢花を持參にむこ入をしける夜、をりしも植木屋木鋏をもツてはいりければ花どもこれを怖れて小さくなッて居るゆゑ。（植木屋）ハヽア今宵花聟の來るさうなこれを無情に切るでもないとすた〳〵歸りければ仲人かほをあげ。そろ〳〵おひらきにいたしませう。（可樂作　江戸自慢）

聟の舞妹がさきへ見附け出し
浦島は齒肉をかんで悔しかり
得かたき金去り難き嫁を取り
大丈夫むこおや船の梶を取り
ふはついた娘に聟の押がきゝ
にげ足の聟破寛弓に射止られ

大津繪

そこへ行のは雷ではないか。たれだと思つたら奴の鎗平か久しぶりで逢たなア時に手前がこがれて居る藤娘に聟が來るが知て居るか。イヽヤ知らぬヘ氣のもめた話しだなア、シテ何方から來るのだエ。アハヽ、仲間の中だあてゝ見な。かうと男振が好いからお若衆かな。ちがッた。ハテナ坐頭の犬の市ではあるまいしどうも知れねヘ。アノ辨慶よ。ナニ辨慶――、あいつの女ぎらひもあてにならねヘの。アハヽヽおまけに大かね持だ。（今人　升の屋作）

山里やむこ連れあり宵月夜
聟が秋手のまはりたる菊田哉
言傳が婿かくしゝく十夜かな
聟見合はやく仕舞た花見かな

花梅嫁山惜家の火のらの消
よがと家つかたるのりやな岸
め香つのてらのあたるのりやな岸
のやてらのあるしろ門彼
婿嫁畑嫁消ところしるのりやな岸
子となるかのえ門彼
春ま月きな設顔

櫻紗一
雲具物
霞
梅季多隆
代
々女女眠室

嫁入

とんだ御幣かつぎの男ありしが今度惠方より嫁をもらはんと結納も目出度濟さて婚禮の夜となりかの嫁の衣裝も寶盡しの物縫ひ下着は千兩箱掛鯛線起の百兩などの物模樣といつは奇妙にめでたい嫁入だと盃も濟で綿帽子をとると、お多福。（寛政版　花間笑話）

あき風をふせぐ持參の金屏風
すゑ長くいびる盃ふうと差し
おや椀へいゝエ〳〵と蓋に成
客分といふ分の字に戯があり
皆より今朝冠りたき綿帽子

うめぼしの小首は嫁の頭痛なり
數球袋よめけいはくの初めなり
看經がすむと居ずまへ嫁なるす
看經のあいだうれしい顔ふたつ
双方の親こんなではあんなでは
瓜ざれを見せて南瓜と取かへる

嫁姑

むせうに無理をいふて嫁をいじる姑あり、あの無理は如何したら直らうやらと明暮嫁の苦勞たえぬところへ町内から寄合をふれて來るハイあるじが留守でムりますから歸りましたら申聞せませうといふを姑ははや鳴り出し。おれが内に居るに何でもおれにはひし隠しにする何の寄合ぢやと叱られ嫁はさそくに。イヤ他の事でもムりませぬ此町内に嫁をいびる姑が二人あるほどに意見をして事のないやうにせうといふ寄合でムりますといへば。ハテナいま一人は誰ぢや。

（安永版　鳥の町）

持連嫁

おさまらぬ去去去去人佛理がの中姑

ちりりりのの堂

へは、來ぬ返むまをにへらまだいこたすりもぬ

姑もにはきの

とのだこ字のとさ

あいなかださ

置とてみ書とと

所が取だく見か

るなるる（同上）期。（同上）

むるでみ世ら

つ憎墨れで驅ぎ

なんら嫁ん嫁ぎ出し

ししもの事し

いさりの事

し。（古謡）

ある人の新婚を祝ふて

羽をならべ枝をつられて長まくらながき千歳も二人して經よ

四方赤良

花よめがかふれる雪のわた帽子をしくもかくす月のまゆかな　歌山人

雁かれのひたひつくりし花嫁にむかしかうかいとらす母おや　文語横棒實

雪と見るわた帽子をもとらすれば　顔に火ともす梅の花よめ　綠樹園

雖波津をならふころよりいびなつけ　今を春邊ささくや花嫁　腦の屋波樹

しうとめが杖にもたのむ嫁なれば少しの節もなきぞめでたき　喜月庵無樂

杖になる嫁をもらふてしうとめの柱とおもふせがれにぞやる　年々亭喜樂

持參金よしあればとて夜目遠目笠に着られてたまるものかは　千羽樓鶴成

しうとめの齒にあふ嫁の振舞は物やはらかきしなしなりけり　米龍園金繩

なに事もむれにおさめて居る嫁は腹の大きくなりしゆゑかも　若松千代麿

花よめはすいを通して梅ほしのやうなしうとめ大せつにしつ　羽衣

ふるへつくほど笑くしき顔かたち　はだか承知でもらふ花嫁　綠泉園嶺門

玉くしけふたりさあらぬ花よめと　ほむるはもさが箱いり娘　千代麿

下手なのを嫁にと思ふ躍りかな

物うさになれて雪間の嫁菜かな

結納をおつかはす
嫁安堵司の馬
丸い姑内証での
綿の紙衣にに返事
の柔かい柔かなる
蓋のくたびれ
つめたの
嫁

姑はすぐに見
嫁なるとすぐ
ずさしろり

下女
子が一人出來
いしめ
ぶうんと
小さい島の
花かれめの勤
よん姑てめ
め心がの
にさよも湯
毛鬼めえ治
虫千の立
千疋浮つ
疋の名
ふかの
るみ
いも
下結
女ひ

況んや嫁におひておや成り
なるけ事なりいに
れ故ぬ嫁めに利へ
うさ胸をに押きひ
行はつ
かて
行

振り袖を二度着やうではなけれども
なりかうなりけりやうさるもそれ
去りぶりのそもそばでにこ〳〵珠數をくり
狀のそ
ふくさも後は寢易き蚊遣り散　不角

母は目になみだ蚊遣りの句を意見
去られては親へもしうさぼさ氣兼

行燈の
四角間の
三本の張り
酒の
者に
つ
よ
め
の
出
ふ
き
者
荷

花も根引き
めよる
彼岸中
鬼は留守
は日よめ
の
む
ね
親
に
な
で
子
に
さ
す

松の
砂高
の
ひ
の
氣
の
本
に
の
音
入
の
調
が
出
ら
ま
ず
ひ
子
嫁
さ

嫁病氣さうだらういふ病ひなり
來た月をなぐらぬなり
一つ姑の身をぬ〳〵ふてはつ
喜び機嫁ふ二ツになるしたく
親風の度織で立てなし
柳にうける石女一人泣き
嫁の孝

辨天が布袋にかはるお目出度さ
腹帶をしめるさ親の氣がゆるみ

くはせもの

あるもの女房をよびて婚禮の夜つく〳〵見るに大きな年増なれば一間に入て後。おのしはいくつになりやるといへば。アイわたしはてうど四十でムります。ハテ媒人の口では三十じやと聞たが四十といやるは覺束ない眞の年はいくつだざつと言やれとたび〳〵問ひけれどもやつぱり四十といふにどうぞして眞の年を聞たく工夫して居りしがふと思ひ出しいきなり眞裸になつて駈出すに女房肝をつぶしてアあなたどこへお出なさいます。イヤ霄に鹽壺の蓋をせなんだ鼠に喰はれやうから直してこやうといへば。ハテとんだ事をいひなさいわたしもこの年になるがつひぞ鼠が鹽を喰たといふことは六十年てのかた聞た事がない。（十千萬兩）

身巾さへせまき二度目の婚禮はよめの夜具さへはり替しもの
おかへりの荷物のきづもなかうどの塗り隠したる嫁が手道具

秋の松の門鶴子

夫婦門

精進

りんや今朝もらッた魚をこしらへろト言ひつけると女房傍から。おまへけふは大事の精進日だからおよしなさいまし。ナニ精進だ何日だ。けふはお前先の佛の日でムります。なんだ先の佛の日だと夫におれが搆ふものか大事ねへおれが食ふからこしらへろ。おまへもまゝよく積ッても御覽じろ先の主がかせぎ溜たおかげで今も斯して居るぢやァムりませぬか。ナニ先の亭主のおかげだコレなんぼ入夫だらうが男をつぶして貰ふめへおらァ先の佛にはかまはねへ早くこしらへろ食ふぞ〳〵。なんの男をつぶすものでムんせうですが貴郎。ウンニャ食ふ。いゝへなりませんと夫婦喧嘩を聞かねて木部屋から

權助かけ出でゝ。これはどうした物でムりますお二人ながらチトおだしなみなさりまし總躰あなたも先の佛〳〵とおッしやるがわるいハテ先の佛の事をいふから今の佛の氣にさはります。（文化版江戸嬉笑）

初夢

女房百人にむかひ。アノ旦那わたしは昨夜いやな夢を見ましたわ。ムヽどんな夢を。アノーあなたと喧嘩をした夢を。さうかそんな夢は獏に喰してしまへ。デモあなた犬も喰ひませんもの。（今人　柳の屋作）

むつましう互ひに心さり勝も　夫婦別あるは一箱の中　香以改人

睦ましい夫婦は勝でむしり合ひ
八寸なら四寸づゝ喰ふなかのよさ
夫へ乳ばさうよと亭主怨れてする
そなして棚に鰯がざりやす
先妻に世話なやかしたご今のなり
精進をするに後づれ氣に喰はなし
女房ぼに世に徳用なものはなし
品川に居るにかげ勝二日すへ

安産

餅屋の女房やす〳〵とうみおとす、ばゝアがとり上げ。モシ御亭主此子はをしい事にさいづち頭ぢやといへば亭主兩肌ぬいで赤子のあたまをまるめ直し。ソレ團扇であふひだり〳〵。（未詳）

守り刀

清公が妻、アは産をしたが變なものを産だ。ハテなにを生だ。守り刀をよ。ソリヤとんだ事だ行て見ようと四五人集り。ぬいて見ようと一寸ばかり拔て見たところが大の鋏刀、ずつとぬき放せば。ときやア〳〵。（百噺り）

親類が來ると赤子のふたを取り
産所から一文やれと見世へいひ
お日出度さ婆アさま跡の祭りなり
水かげん亭主産所へ聞ぎに來る
頑是なくする孝行の人見知り

子の寒冷へ翌日夫婦喧嘩なり
片乳房にぎるが慾の初めなり
酒ならば肴のこゝろ片ちふさ

母の乳をなぐさみにのむ果報もの
あのお子のお子がもうはや此お子か
美くしい顔をくづして子をあやし
わが腹がへると子守はかへるなり
愛らしさ春まつゆびをやつさ折り
京までは手を引いて行く手習ひ子

桶の中からまゝ母の顔を見る

まよひ子はおのが太鼓で導れられ
迷ひ子のなき〳〵つまむ盛かな
泣くよりも慣れすて子のわらひ顔
しら露やすて子にくれた笠の上
乳もらひの覗いてかへる蜜柑かな

初午や桶の小里は子の多き　梅蕉

（発句）—蝶子門

怪氣門

やきもち

これ旦那もう起きさんせと揺り起せば目をあいて。ェ、むまい夢を見て居たに大事のところを起しくさつたと舌打すれば。そりやまァどんな夢を見なさつた話しなさい。ナ、上野のやうなところへ行てそれは〳〵どうもいへぬ美い女にあふてうか〳〵と跡について行たれば茶屋の二階へ上つたと思へおれも茶屋へあがつたればその女がおれに話しをしかけおつた其時のうれしさそれから何の斯のと互ひにうちとけての。ェ、さうして如何したへ。ナ、それから、はなれ座敷の獨吟を合方に粋な振事があらうといふ所をてめへに起されたァ、殘念だといへば。ェ、眞にそんな夢を見るお前もお前ぢやがあつかましい其まァ見られた女めが。（末詳）

一百石

さる御用人の御内儀燒もちをやいてならぬ故同家中の若ものどもあの内儀に氣をもませてやらうと亭主に言ひ合せ百石に一人つゝ妾を置けとの御布令だといふ。かの内儀腹を立て。旦那さまエおふれの趣御承知でムりますか。チヽ承知とも〳〵三百石取るから妾をもう二人抱ずばなるまいといへば内儀髮を逆立ておもてへ出る。コリヤ血相かへて何所へゆく。エヽ御役所へまゐります。シテ何の用がある。エヽ二百石返上してまゐります。（文政版 咄安寶）

神木

丑の時參り神木に灸をすへて居る。宮守見つけ。なぜ釘をうたぬぞといへば。なにを隱しませうわたくしが咒ふ男は糠屋。（同上）

稻荷山きかぬ祈りにうつ釘も　ぬかにゆかりの藁の人形　元杢阿彌

（參觀　君子門——稻荷詣）

草木の神も慢ふ女の腰も腰ろしさで
腹のそ火ろのがし鳥のるに
もい角ては頭螺は燭ぐ三ま
え角てを手燭本になしりさ

鉢の木

悋氣ふかき男能見物に行きてやがて歸りければ友達來て。今日は能見物と聞たが早い歸りだの。されば心持がわるさに半過に出て來た番組はなんであつた。弓八幡、橘辨慶それから何かしらぬが雪ふりに坊主が來てとめてくれといふ主のるすじやならぬと云ふたがそれ切で出て來たが跡でとめねばよいが。（梅屋敷）

やかずに居ればやかぬとて感をつけ

それ下女をぶつは苦肉のはかり事
うかれてる面が見たいと女房いひ
要のむれしめしまゐらせ候でもえ
置きかれる留主の手紙にさとる妻
女房のおこつた夢を猪牙で見る
女房のやくほど亭主もてもせず

妾宅に　火災保險をつけしぞと　聞く女房の　やくもうたてし　手形裏垣

離別の後の悋氣（古諺）

風引ぬやうに召しませ猪牙さやら
言ひぬけなみんな女房に覺えられ
なくさみに女房の異見聞て居る
あさ歸り威あつて猛き女房なり
朝歸り下女たきつけて知らぬ顔
鐘から出たさいふ面で女房やき
ぶっつけるやうにかご賃女房出し
びんさして女房戸口の錠をあけ
憎無にいふが格氣のはゞめなり
なぜ急にいろへさ女房縫ぬなり
欺欺してもいけぬさ亭主外でいひ
他にやく人があらうさ言てやき
ゆふべの口舌今朝のは喧嘩なり
ナン義理の此義理のさて出られやすり
ある甲斐にムりやせんさ女房やき
風吹はゞこころか女房大嵐
傾城は空盲女房小盲なり

目についた女房この頃鼻につき
川竹な妻に持つたでふしだらけ
大名にうまれぬ德でめうさ旅
乳の黑み見せて夫に旅出立せ

戀情門

九十九夜かよひし人の足つよや
見そめてわれは腰をぬかすに　酒粕

百夜車

今はむかし小野小町美人の名高く歌は世にしれる所なりされば戀したはざるものなし中にも深草の少將思ひのたけをしらせんと雨のふる夜も雪の夜も通ひて車の榻に其數を書て九十九夜通ひしかど此戀叶はずして焦れ死せられしといふ取沙汰、女中遠これを聞、小町のおそばへまゐり。少將さまにはつひにお果なされましたおいとしい事をといへば小町聞て局を呼び。コレ其惚帳を出して少將どのゝ所は消ておきや。（寛政版　開卷百笑）

通小町

ある御公家さまの御姫さまに〻の久つけたれば。今宵より百夜通ふて夜毎にかよふたしるしを車の榻にきずつけよ百夜すぎなば必ず逢むとの返事うれしく雨のふる夜も風の夜もかよひ〳〵て九十九夜め車の榻へきづをつけ立かへらんとせしところ侍女出て袖をひかへ。お姫さまのおつしやりまするお通ひなされて九十九夜一夜ばかりはまけにしてあげませうほどに妾につれましてお居間へすぐにまゐれとの事といへばこの男たゞ。いやはや〳〵との挨拶。なぜそのやうに仰有りますといへば。アイわたくしは日雇でムります。

（明和版　鹿の子餅）

初恋　智嘉内子
忍久恋　鹿都部真顔
深夜逢恋　頭り光
稀逢恋　栗丸

こひ衣仕立はじめの恥かしさ人におもても合はされぬほど
くひしばる袖は涙にとく朽てしのふの草のはこたへもなし
待かねて氣を落したる小夜中に君のお出はひろひものなり
まれに逢ふ夜は俄蟲薄の花よりもさいて見せたき我胸の内

さとり

きのふ途中で見かけた藝妓の一と群れいや美くしい〳〵なるほどこれでは如何なる君子も城をかたむけ家土藏を失ふはづと實に感心いたしました。コレ〳〵それは貴公にも似合ぬ事をのたまふものかなかの鬼貫が句に

骸骨の上をよそふて花見かな

かならず色にまよふ事なかれ悟りたまへ〳〵と示せば。ハヽアあゝ見えましても性は骸骨でムりますな道理こそみなしやれて居りました。（可樂作　百の種）

初戀　はつ戀よ秋にあまる春のあめ　越吐月
待戀　まつ戀の先聞つくる蚊遣り哉　別戀　長き夜は長きにつけて別れ哉　千影
恨戀　錦水に恨みのふとる氷柱かな　麻父
長恨　玉はしるつゆは夜毎の恨み哉　監
歌　秀

百鳥おどし

都清水の舞臺から美しい娘が飛とのうわさ京中へ聞えければ舞臺の下は大群衆かゝる所へ侍女あまた打つれて美しい娘が參詣、見物はメリヤ彼れじやと、ジヤ〳〵といふ中をかの娘は押分け〳〵本堂へまゐり暫く拜むで被衣着ながら舞臺へ出で高欄に片足かけ方々見廻し〳〵。「アヽ今日はどうやら飛ごゝろわるい止しにせうと供人打連れ立歸る、又翌日もその通りにて歸りしが、道々侍女とさゝやくを聞ば。あゝ殿達をたんと集めても美い男はないものぢや。（廚可茶）

娘　撰　男　よい男ゑらむ心もつくし野まだ十三のいとゞ思へと　柳下亭　曙笹

よい娘何の憲　趣だか悪くいひ
十年は蝶よ九年は花よなり
我胸を親に貸したき聟定め

めかけ

いきな息子妾をかゝへ友達をよび自慢心。コレおきくお茶を持て來いといへば。「ティと茶を持て出る、友達ども。これはすごいものぢや何方からあんな美しいものを伴て來たのだと賞めちぎッて歸れば息子よろこび。「コレおきくいまの通人がいッそてまへをほめたおれがつく〳〵見るに風俗は家橘で顔は福助にそのまゝだよトいへば。「めかけ」おまへも通ほどにもないチット似ればそのやうな事をいひなさる。（八三男作）

妾のみよしのゝ花と殿めでゝいかてか奥をたづねざるらん　藤の屋
雀屋のさへづりあげしお妾も　今こそ鶯の羽ふりありけれ　語同屋

お妾のきづは鼻から煙か出し
圓ひ女は普天の下にそっと住み
私をにらめましたさめかけ泣
身につい出た果報と妾にくい口
おれ共に上みは五人さめかけ言ひ

不用品

六さん妾も一人の後家世帶、こんなに諸道具があッても使ひきれないから入用なものはいけないけれど不用の物はお前に上るから持て行ても宜よ。ヘエそれは〳〵御不用のお品なら何でも下さいますか。ア、上るとも。それではね。ア。それでは、思ひ切ていひませうがあの一貴婦を下さい。（今人風龍軒作）

幟り竿　後家は杖とも柱とも

後家の年内端にあてるいやな奴
一分のび二分のび後家の亂れ髪
髪を剃る遺言は後家よしにする
擅那寺草葉のかげの見人になり
お白粉をつけて汚れる後家の顔

半分の埒あき

ある所の侍女に近所の若いものの多を付けれども否の返事もなし、友達聞て。貴所が兼ての事はなんと埒があいたかと問ば。半分は埒があいてあるといふ。それはどうした事ぢやといへば。さればおれは合點なれどまだ先が合點せぬといふた。（浮瓢箪）

下女

いゝ男うれしがらせを下女にいふとて。おめへは奈何もかわゆくてならぬといへば。（下女）なに嘘ばッかりおまへのやうなよい男がわたしのやうな中位おなものに。（文政版　開卷百笑）

あてもなく下女ぶら〳〵と戀病ひ
下女ものおもひ雜巾も手につかず
下女が戀五つ筋ほどにおもひつめ
かな釘をみゝづと下女は取かはし

自惚

若いもの大勢あつまり。なんだか素噺ちやァ面白くない蕎麥でも買ふではないか。ム、それもよからうが斯うしたらどうだ此中での色男に奢らせる事としてはといへば一人の男頭を押へ。これはめいわく。（宋詳）

こひふみ

コレ何をそんなに考へて居なさる、氣から病ひが出るわいなト脊中をたゝけば。他ならぬ君のこと、面伏ながら申しませうが、貧のぬすみに戀の歌、まはらぬ筆にいひやりし思ひのたけの返しがなきに在五の君なら口なしにしてとでも詠むところ、君はなんとおもひたまふ。ふむ、シテその戀人は。さる歌人の愛娘。それではてにをはで來た譯で。トハまだ如何いふ。仔細といふのは、まづ其多はそれなりけりさ。（今人　小梅の畔人作）

言譯もゝはやさかぬ帶の尺
現よりは外に知り人のない病氣
人間にしり目とい人のへる飛道具

論語よみ思案のほかの假名も書き
恨みいふ聲がくもれば目にしぐれ
氏なうて玉のこしもさ酢たこのみ
氣があれば目も口ほどに物をいひにくい
ほれたさは少しの事で言やれは忌味な
いやならは否さ言やれは忌味なひり
すめの氣で叱るのな下女笑ひ
きむ

こたつほど話しの出來ぬ涼み盞
すゞみ盞似顔の邪魔にしぶ團扇
こゝに居りやすと娘の門すゞみ
よめ入りがいやさは母のきめ處
こゝなよく聞きやさは母親小聲也

母苦勞ゆうべも梅が三ツ減り
おさとしたさ言れぬ御のあり所
すはり直されドやうだんだん〳〵

雜夢門

初夢の大吉

今宵は初夢ヒヨットわるい夢でも見れば氣にかゝるが邯鄲の枕をして寐れば榮花のゆめを見るといふにより舊冬から聞てあるいたけれども何所にもない貴樣しらぬか。それはない筈だ邯鄲の枕といふは千年を經た南天の木でこしらへたものだ。道理で樋屋にも丸角にもなかッたそれではどうで今夜の間には合ぬナント南天の葉では如何であらう。されば葉では合點がゆかぬが只には增だらうまづ物はためし葉を敷て寐て見やれと別れさて翌日さう〳〵行き。どうだゆうべの初夢は。イヤハヤ奇妙〳〵物のいらぬ事だから南天の葉をおもいれ敷て寐たればとんだ祥い夢を見た。ムゝどんな夢だ話しやれ。アハゝ一夜中赤飯の夢を見た。（蝶夫婦）

二日の夜かうべは神の御木陣
君が代の枕言葉はながきよの
あさきもない夢を見る寶船

酒

酒一升徳利へはいつたまゝ拾ひ。これは難有いと早速燗をつけて居るうちに目が覺めて見れば夢、エイ冷で飲ば宜かつた。（安永版笑たれまき）

さめて猶さするかいなに妹の歯のあとなき夢の名殘りをそ思ふ　山道

いもが手をたしかに握る正夢は　誰にもかうとはなしともなし　細道

逢ふと見しゆめもさむれは紫の　れこき人こそうらやましけれ　智恵内子

かれも夢これも夢とは思へども　かれこれ世話し　夢の世の中　金雞

初夢や渡首にいふも君は千代　季吟

初夢やありあまるほど金銀花　令徳

年立や夢のそら冒蜜にかゝむ　椿堂

見しゆめの末あるそらや時鳥　草均

聖人にならぬのもよし富士の夢

二日の夜摸しんまいの夢を喰ひ

蚊帳の夢摸は濕し粉を喰ふこゝろ

無常門

極樂

馬方の八五郎家業に似合ぬ後生願ひにて念佛の徳にや死ぬると其まゝ佛になりしがどうも乘つけぬ蓮の臺、いたい足を耐へて坐ッて居るうちもどうやらすると蓮臺がゆら〳〵するゆへ、横の方を一ッたゝいて。ドウ。（膝可茶）

桶と花さげて定紋見てありき

若黨に役者の墓をさがさせる

うち敷は花にあらしの惣摸様

上下でもてばあはれな螢かご

幽靈のなまみひちぎり頭なり

いろ〳〵の願ひ

若き者ども打よりいろ〳〵の話しをしつくしあまりの事に、おれは臨終のよいやうに勞咳をやむでしにたいといふ、おれは戀病がよいといふ、おれは離魂病とやらがわづらッて見たいといふ、また一人はとかく何も入らぬ頓死がよいおれは屹度とんしをするぞといひけるが、案の如く四五日して頓死しければ、友達あつまり涙をながし さて〳〵先度あれが頓死するといふたが可哀やと悼む。其中にとへうものありて。さぞあれが生て居たら自慢いふであらう。(安永版 噺大集)

すげ笠にある名で 頓死よび返し
わらび取り二本塔婆へすて念佛
石屋さへもらひ泣するよい辭世
あはれなり 屏風の腿の濕下り
さき立し子のおもかけに二三丁
極楽は見たい所だが行く気なし

うわばみ

添ふにそはれぬくされ縁二人つれ立ち心中と出かけしを大なる蟒出て只一口に呑でしまひぬ二人は呆然と腹の中にいたり。とてもしぬる身なにかはとところ嫌ふべきと一刀ぬきはなし女をさし殺して其身も野腹の露ときへぬ大蛇おどろき。サア〳〵大事だこれから撿使を呑にゆかずばなるまい。(未詳)

煎じ茶

茶釜をしやん〳〵煮たてゝ茶袋をうちこめばむら〳〵と立つ湯氣の中より白無垢を着たやつがすッくりと立て出る。ヤア幽靈ではないかなんで出たといへば。ほうじがたりませぬ。(未詳)

幽靈になれば平家も白いなり
幽靈はみな俗名であらはれる
しつぽりさ和尚の悔み駡た者
ぶち活すぞと地獄での大喧嘩

火の玉

これはむかし淺草山谷町に上總屋なにがしとて富貴にくらす人あり好色者にて中近江屋の花里といふ女郎を身受して箕輪にかこひ置けり、上總屋の女房ほのかに知りて嫉妬の心ふかく何卒花里をなきものにせんと一心に祈りける、花里もこの事を知りて本妻なくばわれ女房にならんものをと嫉みて祈りけるが、互ひのいのり勝敗なくむざんや兩人共相果たりしその夜より大恩寺前へ火の玉二ッ出て打合ひけり、此事評判つよくなりければ上總屋の主人、これは女房と花里が執念ならんと道心にたのみ毎夜大恩寺前にていろ〳〵供養しけれども更にその驗なく、道心主人に申すは、昨夜も大恩寺前へまゐり丑滿まで念佛申し居たるに右左りより幽靈出で來り互ひに何やらいふ事わからず依て今夜は御主人まゐられそのわけをとくと聞れなにとかして御兩人のうかむやうにいたされよとすゝめければ主人も尤と心得、その夜彼處へいたり待どくらせど何事もなし退屈しはてたるところへ箕輪の方より一團の火の玉ふはり〳〵と來りしかば主人はにッこと笑ひその火の玉にて煙管とり出し一吹のむで居るところへ本家の方より一團の火の玉ふはり〳〵と來りしかば主人襟を正し、さて御兩人おそろひなら一と通りおはなし申さう互ひにうらみの執念、むりとはさら〳〵おもはね共あんまりながいも野暮らしい二人ながら已がかあいゝと思ふなら今得脫してなかよく姉妹分となり心よくうかんでもらひたいなんと女房さうじやァないかと又一ぶく吸つけやうとすると女房の火の玉ふッと消えて。よしなさいわたしのではおいしくあるまい。（慈悲成作　養談敷）

幽靈

なじみの女郎の方より多がきたり。このものまへ二十兩の金がなければ生て居られぬわけ死んでは兼ての約束夫婦にもなられぬことなれば是非とも二十兩の工面たのむとの文言むすこは惚て居る女のこと命づくと聞て不便に思ひどうぞ金の才覺してやらむと思ひしが都合わるくそのまゝにものまへも打すぎむすこは只苦勞にして金をやらねば死ぬとの事ゆへさだめし死んだであらう可哀さうにと獨つくり思ひつゝけて居たるところへヒユウドロ〳〵にて女郎の幽靈あらはれ。金をよこしてくれぬから命をすてたとの恨みむすこそのまゝすがりつき。ヤレなつかしかッたよく來てくれた話しがあるまァ下に居やといへば。イヱさうしては居られませぬ。それはなぜ〳〵。まだ他へ出る處がたんとありんす。（一九作　嘶の藏人）

皿やしき

お菊の亡魂古井戸より出て一枚二枚三枚、九枚といッてはわッと泣聲するゆへ旅僧來りさて〳〵不便なことゝおもひ珠數とり出して。俗名きく順生菩提なんまいだ〳〵といへば。（いうれい）ハイどう勘定いたしても九まいでございます。（宋詳）

反魂香

女房に別れいま一度逢たき由友達にはなす。（友だち）傳へきくに墓の前で反魂香をたけば姿があらはるゝといふ。そんならばと藥種屋へゆきつひ反魂香をわすれ反魂丹を百文買ひ墓の前にて焚けるに墓づし〳〵と動く。秘密のたきものゝ驗ありとよろこんで居るうちはや反魂丹たきしまひなればもう百がくべようと宅へ錢を取に歸ると母親聲をかけ。今の地震にどこであやッた。（文政版　咄安賢）

反魂香

宿屋飯盛　御山苔松　うらずみ

去る家の息子ある遊里の藝者と色事にて二世三世といふうまい中なりしが麻疹のために藝者は身まかり踪にのこりてかの息子たゞくよ〳〵とあこがれて居たりしが不圖反魂香を思ひ出し小さな香爐へ線香を立て珠數爪くりて唱名なせば不思議やドロ〳〵になり藝者の姿すッくと現れ、にッと流し目で見ながら。ヲヤ嬉しいのと言ふ。アヽよく姿を見せてくれたそなたに別れてその後はトしみ〴〵話しをする間もなく。アレ〳〵閻王のお迎ひしげし、さやうならばと立上るを。ヤレ待て少刻と袂にすがれば幽魂ちよいと振かへり。線香がもうたちやした。（文化版　江戸嬉笑）

なき人のむかしをくれば。あはれ世にみゞかき珠數のたまの緒やこれ魂柳なる見るにつけても竹馬の友や牛つれのさも門口にもの申さうといひながら申しあぐべきことの葉もなし

この佛さまもお好きと土手で言入道は眞水を飲むでさきへしに

歌俳門

ふはとのる

ある人連歌の席に句を出し、けしからず慢じたる顔を見つけ。わからいき天神〳〵といふて膝をつきければ。あまりなつかれぞ社壇がゆるぐにと申されし事よ。（萬治版　醒睡笑）

頓作

青青苔をいり豆につけたる菓子を太閤の御前へ出したれば、幽齋公にむかはせ給ひ、なに〳〵とありし時

君が代は千代にや千代にさゝれ石の
いはほとなりてこけのむすまめ

百人一首

ぜんてへかしら此百人一首の中にある赤染だのうこんだのといふ名のあるは何だらうノ。そりや百人しゆの中の紺屋よ。ソシテ伊勢だの相摸だのといふのは。あれがおかみさんさ。そしてモシ此人麿だの仲麿だのトいふのは。哥麿や月麿の先祖で畫かきさ。かんけといふのは。建立方のほうさ。そんなら猿丸太夫といふは。義太夫語りさ。そこでこの大輔だの元輔だのといふは。ハテ知れたこと御膳たきだ。（可樂作　種がしま）

喰ふ事はまづ第一と定家ゑりの赤染も周防も同じ緋のはかま

三神は小なる町ぶ大きさよ天帝豆帝かるひ御姿底ののへ居れめ待櫻雨ぶ因果こ事

山待櫻雨ぶ因果こ事
よのみ提り能きなよ
人まは町ぶ大きさよ
知でり只居れめ
ら只ぬの者侍は從りかるひ御姿
ほころびの歌でねふべき矢をのがれ

子日

正月子の日に歌よみあつまり歌をあんじて居るところへ隣りの儒者來り何事だと問へば亭主。けふは狂歌の友だちが二三人來やしたから一首よみやすゝめへさんも何ぞ御よみなせへといふに儒者座敷へ通りみれば座中のこらず短冊に子日とかいて。どうもよめぬと案じて居るを見て儒者はさう〳〵虚敷を立出で。さて〳〵狂歌よみといふものは文盲なものだといへば主人むつとして。どうして狂歌よみは文盲なといふ。ハテサテ大勢よりて居ながら子日が一ッよめぬといふて居る。（裏方棚）

歌よみの　下手こそよけれ天地が　うごき出してたまるものかは　六樹園
どのやふな　雛壇目が出やうとも　よむが妙法　れんが狂歌師　蜀山人
うくひすも　蛙もおなじ歌なかま　經よむもありたゝなくもあり　大屋裏住

俳人

初心の人俳諧の宗匠のもとを訪ひ。先生うかゝひたい事がムります何でムるな。ハイ季寄を見ましたら春の部に山笑ふと申す題がムりますがあれは何の事でムりますな。サレバ冬の山を眠るといひ春の山を笑ふと申すが則題の意でムる。いかさまそれで譯がわかりました。如何分りましたな。ハイ餘程以前も信濃なる淺間はふッとふき出しました。（天保版　噺鬪會）

芭蕉

いさゝらば雪見にころぶところまで。と申す句は名高い句でムります。すがそのはせをとやらはよく轉んだ人と見えますナ。なぜれ。デモ人がおきな〳〵といひます。（可樂作）

春興

先生歳旦をいたしました。それはお奇特なんとなされた。此扇下さるならばありがたい。アハヽおかし扇は夏の季でムるゆへ春の意をいひたいもの。そんならかう致しませう。なんと。此扇くだ春ならばありがたい。（安永版　鳥の町）

ころばずば翁の雪見はてがなき
初雪や降らずさいゝと小僧よみ
百韻は紙くづ買ひも去りきらひ
つはものゝ夢のあとゝふうた枕
雪の日に文臺へのるたるひろひ
ひろい紋帳ひろい操が見え遊り
おもはず知らず良室は一句出來

初卯

これは〳〵旦那初卯へいらッしやいましたか誠に古風で宜うムいますな、ところで例の俳諧とやらも。ム、出たね。ハ、アなんとでムいますな承りませう。アハ、、一ッ評をしてもらはうか、星影の水に掉さす初卯かなッ。どうも畏れ入たものでムへやすな星影の水に掉さすは兎も角、初卯かなとはうまい。（今人市山亭作）

共角

今もなほためしに引ん　みめくりの　田をうるほしゝ寶井の水・　天遊雲人
この人のこのみに成れる　俳書とて　みなし栗あり頻柑子あり　塵山人
晛かるゝ乞食の家も　たえし世に　うめは昔しの香に匂ひけり　不二の屋

山吹の後はぬれましものさよみ
一聲におすゞり水のお手がなり
まかなくに古今まれなる洗濯し
十徳と十二一重でいゝまゝあり

謡曲門——能樂——舞樂

熊野

佛には毛があるかなきものか。いやない、むけくはう佛とあり。いやある、けぶつ菩薩といへり、互ひに論じて堂坊主に判談を請ければあるにあらず、なきにあらず。それは何事ぞ。ゆやの謠に末世一代けうすの如來とつくりたるほどに。（萬治版　醒醒笑）

作者めいわく

高雄神護寺の文覺は聲のたかい人であつたといふがあら行をせられた奇特さよと。聲のたかいといふ事を今迄はきかず書物にあるか。勿論誓願寺に虚空にひゞくはもんがくの聲とつくつた。（同上）

謠違ひ

聞取うたひを知ッたふりにて謠ふ。みだたのむねがひゝ四ッの御山を〳〵けふ立出る旅衣きの知盛がたつか弓。ハテそれは誓願寺かと思へば舟辨慶のやうな所もあり何といふうたひでムると咎られ。是は誓願寺さ。それでもどうやら變だトいはれ。されば元誓願寺。

（安永版　島の町）

火燵

能好きなる男勸進能を見物して歸りに西風烈しく吹立られ早くかへッて火燵にあたり寒さを凌がんと急ぎかへり見ればこたつに火はなく滿圍はたゝみて櫓の上にありければ、滿圍を目八分にたづさへてうらめしさうに。下「見れはなつかしや。（同上）

高砂

當春西國へまゐりまして高砂の松、尾上の鐘も見物いたしました。それはおうらやましい事の。それについてお前におたづね申したいはァノ高砂のうたひに尾上の鐘のおとずなりとムるがやはり釣てムります。そのはづ〳〵。なぜナ。ハテあかつきかけてトあるからは。

（同上）

泰平樂

音樂社中あそびに行き。憚りながら先生此間の越天樂はようお出來なされました。イヤ足下の太平樂がトはなすを。〔女郎〕まァお人柄にもお似合なされぬ。（同上）

能は嘘の種

神は、人の敬ふによつて威を増すとかや、千早振上加茂の神事能を毎年六月勤めけるに、近郷の百姓はじめて見物をけるが、つれの者にいふやうは、さて〳〵能といふものは大きなうそをいふ事ぢや、あの男は此村の庄屋のむすこ五郎作といふやつじやか、是は平の宗盛なりとぬかしをッた。（元祿版　初音草咄大鑑）

樂　人

雲井ちかき　心も高き樂人は　富士か淺間の末にやあるらむ　花垣眞咲

入あやの　袖うつくしき青海波　迦陵頻伽の鳥　かぶと着て　花林堂

鈴　鐘は無銘　面には名があり

ヲキの僧　煙草盆でもほしく見え

袖口と　扇なもッていぞ候

南無大乘大秘觀世が道成寺

御調の上むらさきを御免こん

瓦以後手練世上へ名も博き

茶の湯

物知り顔の男茶の湯によばれ先方の主人いろ〳〵道具を出して。この茶杓は千の利休が作でムるが今拾五兩ならたれでもほしがりますに千の利休などは惜いことをされましたといへば物知り顔に。さやうさあれも助六が居らずばあのやうな目にも遇ひますまい。

（可樂作　書名未詳）

大名の手煎ト利茶させはじめ

道樂の理に落たのか茶の湯こ

茶人でも妾はやはり美くしい

一服の茶がこくなッた五條坂

なとめ子か　見あひの席へはこぶ茶は　只ものいはぬ山吹の色　夏の屋鈴志

栂の尾に　植て仕あげし茶の味な　これは妙惡と　めつる上人　どん亭三升

いろに香に味ひよきは諺の　うぢよりも茶の　そたてからなり　ごく堂商人

花鳥一躰

立花ずきの人近々はれがましき會あるに付き山入して諸木見廻りしに紅梅殊に見事なる枝ぶりおもしろきを人足をして切らしむるにこの枝に鶯とまり居てさも樂むていなり主人おもへらくこの梅に鶯とまりしまゝを活なば殊にめづらしからんと人々に言ひつけやう〳〵鳥のとばぬやうにひき切りそろ〳〵歩行み麓の村へ下りければ子供大勢あつまり。見事な梅わしにおくれ〳〵と聲々にわめきければこの聲におどろき忽うぐひす飛び去りぬ主人の曰。思ふやうにはならぬものかなこの梅に花がなくば子供の目にはつくまいに。

（安永版　噺大集）

圍碁

長雨のため川留に遇ひ宿屋住ひの退屈さ、主人見兼て。お客様碁でもお打ちなさいませぬかトいへば。フトン、この土地にも碁をうつ者があるかなとの挨拶、亭主むッとしたれど、それはとてもお相手にはなりますまいけれど御指南あそばす氣でと、二三人呼むでうたせけるに、いづれも上手にて、客はベタ〳〵との敗北。やれ〳〵小敵を見てとんだしくじりなんと御亭主あれよりよわい人はあるまいかと兜をぬげば、〔亭主〕さやうでムりますあの人達より下手なのと言ッはムりませぬなトいふに、〔客〕さて〳〵不自由なところだ。（宋詳）

一目も二目も心置石に　盤目なつくる　圍碁のお相手　加川屋

（枇杷は一目永日の碁に見くらべ炎宗の桂點のまふまへそこばくなれ客にがへたてはなりの馳けにはへなぼらかし碁熟碁中りの走なる女なぼらかり碁に見くらべ房し光も手柄へ疲なり）

助言

將棊をさして居るに勝らしい方へ助言せしものあり負色の男腹を立てその者の横面をしたゝかくらはしければ此男一ッさんに宿へ歸るあとにてみな〳〵口を揃へあの人い武家方の涙人といふ沙汰大方意趣がへしがあらうがと心配のところへ、鎧兜にて押かけ來りければ、無禮したの男椽より飛で下り。只今は不調法の段平に〳〵御免下されと大地に手をつき詫けるに。イヤ〳〵是はもうぶたれてもよい自支度でムる。（安永版　初登り）

將棊なば二番まけては金を借り
詰んでるに肺肝くだく下手將棊
吹けば飛やうな將棊に附木の歩
飯處か飛車手王手なくッて居る
時すぎて二歩を見附る下手將棊

あたまをばつかれていたく負け將棊　相手は名ある鉛のつかひ手
かくなるは　思ひの外のあき王手　遲もつき歩の　にげ道もなし

春亭
美の庭

淨瑠璃門

義太夫

こしかけ茶屋にて休みながら若いものがいかぬ節にて往來のもの笑ふも知らず「きこへませぬ才三さん」と調子あげて語ればそばに休み居る婆わが涕うちかみて泣くゆへいよ〳〵息せい引ッはりかたりしまひ。なんとばゝさん筆太夫ひつとぬきでムらうがといへばァイわしが息子も義太夫がすきにてちやうどおまへのやうな田分ゆへおまへもおいとしうムります。（米詳）

義太夫の序は引導にこさならす
美人珠簾をまきあげて三の切り
湯で語る太夫は升で水を飲みり
隠し蹲鵜の眞似をするあけ烏
新内で親を反・哺の明けがらす

當世ぢや

桶語りもしかねぬほどの淨るり好の若旦那出入の者のところへ行て毎度淨るりの自慢夫婦のものは追從に。どうぞお聞し下さりませに乘が來て、直に今夜かたッて聞さうと先に立て二階へ上れば夫婦は是非なく二階へあがると上坐に直ッて本とり出し勘平が腹切場調子ぐるひのめッた節夫婦のものも呆れて居ればやう〳〵と語りしまひ悲しいか〳〵二人共かなしかつたか。ハィかなしい事でムりました チットいさぎよい所をもう一段かたつて聞さうと修羅事になるさしもの亭主もポットして聞入たやうな躰にてぐうッと寐入しが。大音上げ――といふのり地にびッくり後へこけて階子からステンドウ、女房も若旦那もはしり下り抱き起し呼活ればやう〳〵と息ふきもどすと若旦那耳に口よせ。長兵衛氣がついたかといへば。ハィおもしろい事でムります。（安永版　咄角力）

千本櫻

ゆうべ呼れて義太夫を聞やしたがなるほどおなし音曲の中でも義太夫節の文句は感心なものだ。イヤ文句ばかりではない趣向でも人の名でもよく緣をとッた物で千本櫻の三の口に三位惟盛の子が椎を拾ふと母御の名は立樹に因のある若葉の内侍だ。イヤ〳〵まだそれよりは二の切で渡海屋の銀平がはげると本名がノ。ムヽ。新中納言だ（天保版　噺圖會）

初花と月のかつらはいづれとも　ふり分けかねる　鱈六のさい
菓子折のあけていはれぬ眞心を　つまむで見する　千まつの忠
浦の名のあこぎなりけり病む母の　ためとは誰か　しら菅の笠　龜の屋　其友
いろは書く兒の文机に假名留めの　きやう帷子を添しかなしき　竹の屋　子尋
松王に見とがめられてはからずも　はつとゝむれをつくる一脚　夏の屋　鈴志
めづらしき姉と妹のたいめんに　もちこむでよき　曾我の本讀　雲の屋　下人
みどりてふかたみ遣してなさけをも　くま野の露ときえし薬柳　濱の屋　眞砂
くれなゐの色にむすめを染もやう　なさけたくみの雨のふり袖　升の屋　鶴成
はらからがかこむもあはれ鱈六のさいなんぞ身にふり掛りける　豐の屋　鶴吉
月待の　よひにちぎりし片袖も　あはれなみだの雨にぬれける　江戸の屋町住　松の屋　鶴吉
柳の屋　露交

吉原八景

ある男の湯治場仕入とも見ゆる急稽古の一中を酒宴の席にてうたふ。松の位の品定めうるはしかりける次第なり。ヨーく、と、終れば、藝妓は三味線を下に置き。ほんとうにこの唄はうまく語ると好い淨璃ですねへ。（今人　巻窓樓作）

櫻をやちらさん風の　吹きあれて　松はかちくもたつる琵琶の音　桃の屋
さわらひのある平糖のこふしさへ　こくうをつかむ　雁の菓子折　弓の屋
たち聞をしたるふすまのうしろ立　曾我物語りよみてさとしつ　瀧の屋
印籠の　くすりは旅の持ちあはせ　くれるも實の　おや指のけが　不二の屋
底ふかき　たくみを知りて喰ふ菓子の折わるしとは明てえいはず　秋の屋
霽時雨　ふるへにあきの朝顔も　ふたゝびひらく　花の蔭あふき　淵生庵
切花を　月の桂にかへてよと　こひ日もあだと　なりしすごろく　玲馬屋

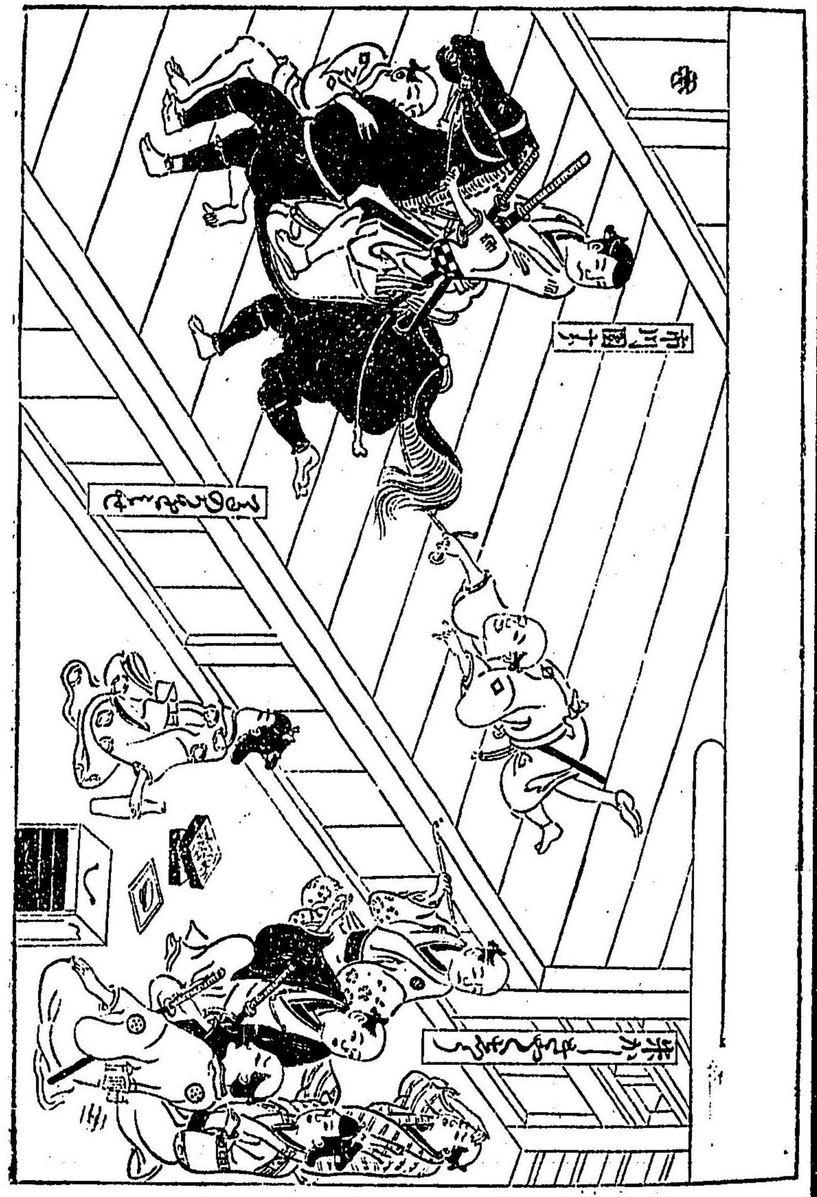
演劇門

堺町馬の顔見世

市村芝居へさる霜月より出る齋藤甚五兵衛といふ役者前方は米川岸にて刻み煙草賣なり、どッと輕口きりやうもよき男なればとかく役者よかるべしと人もいふわれも思ふなれば竹之丞太夫元へつてを頼み出けり、明日より顔見世に出るといふて米川岸の若きものどもたのみ申しけるは、はじめてなるに何卒花を出して下されかしと頼みける、目をかけし人々二三十人いひ合せて蒸籠四十また一間の臺にとうからしをつみて上に三間ほどなる作り物のたこ戴せ甚五兵衛どのへと張紙して芝居の前に積けるぞおびたゝし、甚五兵衛大きによろこびさて〳〵おそらくは伊藤庄太夫とわたくし花が一番なり、とて

もの事に見物に御出と申ければ大勢見物にまゐりける、されども初めての役者なれば人らしき藝はならず切狂言の馬になりてそれも頭いはたらくなればしりの方になりかの馬出るより甚五兵衛といふほどに、芝居一同に、いよ馬さま〳〵としばらく鳴りもしづまらずほめたり、甚五兵衛すご〳〵ともならじとおもひ、ひゝん〳〵いひながら舞臺うちまはッた。（元祿版　鹿の卷舞）

大當り一坪ほどで所作をする一幕を内證ではなす御代參旅へ出て人間になる馬のあし旅芝居目さへ寄せるとなる馬が來る間のわるい役者蕎麥屋の一旦那三階で官女お三輪にいぢめられ馬になる役者は男二疋なり蠟燭を二挺にらめるいゝ役者荒海や闇なる蕎麥屋番殿樂屋番屋番なかみ樂屋番岩なむしって湖なかみ



芝居氣違

芝居好の息子庭の掃除にも男共に釘貫の紋をつけたる袢纏を着せその身は奥よりぎやう〳〵しく見分に出で。〔奴〕もさ旦那様お顔になにやら。〔息子〕むと手を上て顔をぴッさやり、指の先へ蚊をはさむで。家來共死骸を片づけろ。（梅屋敷）

田舍者

いなかもの初めて堺町へゆき芝居見物して歸りけるを。けふは芝居へござッたげな何方へござッた。たしか勘左衛門とやらへ行きましたが何がはや悪い日行き申してろくたま狂言はさ申しなんだよ。それは〳〵さん〳〵であッたッシテ如何な事がムッた。されば、さか澤瀉の鎧とやらがなくなッたとッて一日ハイそのさわぎで仕舞ました。（明和版　鹿の子餅）

鳥の狂言

いろ〳〵の鳥が田圃へあつまり、豐年祝ひの芝居をするとて、狂言は忠臣藏ときまり、いよ〳〵當日となりけるに、開場さう〳〵、割れるやうな大入、やがて掛稻の幕外へ、烏が黒木綿（日の出の紋附羽織上下、三寶（卷物）を載せて、うや〳〵しく持出し、いろ〳〵あッてやがて、役人營名。　トザイ　東西――の

定紋に因みまして

鷹　定紋をかほよ鳥と申まする
燕　異名をかほよ鳥と申まする
鶴　松切の松に巢を營みまする
翡翠　同人が詠歌にござりまする
鵯　活達な處を見立ました
啄木鳥　抱止めますやうに留りまする
鵲　同人がぜりふにござりまする
かもめ　川竹の流れに浮みまする
烏　古寺の撞下に棲みまする
鳩　豆鐵炮をくひました
鷺　これは手間入らずに

惣座中のこらすまかり出で相つとめまするとて、いひかけると、見物のうちから、聲をかけて、これ〳〵師匠はだれがするのだといふ、へイ高野師直義は不斷からにくまれものゝ、この烏が相つとめまするといふと、見物が。ハテ夜討の時目立つていけまい。（今人　小梅の畔人作）

殘り勘定

ある處に大のなまけ者ありしがある日吃の又平が石の手水鉢へ繪姿を書き向ふまで拔るところを一幕見るより。なるほど人も一心になればァいふものかと夫より俄に改心なし夜る晝なしの出精その年の大三十日は餅もつき春着も出來諸拂ひも濟せてにこ〳〵顔の帳合、女房茶を入て傍へ來り。お前さんお帳合は如何でムいましたといふもまたず。かゝぬけた。（今人丹の屋作）

かゝみ山はつか山世は玉つばき　八千代獅子きく　奥庭の琴　花輪堂
すかたみの　鏡の月にまゆ刷毛の　兎もいくつ　ならぶ三階　江都庵
國性爺　きれたる幕の樂屋にも　化粧の紅を　ながす風呂番　雛園
つゝき土間　ませはなけれど戻りには茶屋へ渡りの附し惣花　寶市亭
夕暮の　鐘にうらみの道成寺　押しかへされぬ　大入のはれ　星の屋
くゞり戸の車の音にかたよりて　梅王つかふ　辻のこば色　蝶那言

角力門

相撲と柔術

相撲取と柔術師と互ひに威權を言ひ合ひ後には喧嘩をさうに見ゆる故、兎角すまひを取て勝た人が上手に極まると傍から扱へば尤もとて兩人裸躰になり手合して取けるに、相撲は大力にて頓て柔術師を目よりも高くさし上げ。見えたか〳〵と言ば、上より。かう差し上げらるゝが柔術の手なりサァ投て見よ落ちさまに頭へ足を引かけて蹴殺すぞ投げよ〳〵トいふに、相撲取肝をつぶし、柔術師をさし上げたまゝ。ヤレ人殺しよ〳〵。（延享版笑ひ布袋）

日頃伸よくて恥ある角力かな　蕪村
ひいき持つ心あはれや角力取　梅宝
勝角力風情あるかな亂れ髪　曉臺

夢中

いたッて相撲すきの親父けふは息子が見に行ッたによッて何でも歸ッたら話しを聞かんとおもひ待かねて居るところへ間もなくかへれば内へはいるかはいらぬに。これむすこ谷風と和泉がけふの勝負いかゞありしぞと問へば。いやもう面白きことまづ立合とそのまゝ谷風が二つき三つきかう東の方へはねて行く所を和泉がじッとふみこたへずッと寄て左りをさした谷風も右をさしてよつになるによッてさア相撲が長く成て兩方岩の如く動かばこそと座敷の眞中に大汗ながし引組で居れば外からはいり來たる客がこの躰を見て親子喧嘩と心得。これは〳〵どうでムるさりとはつまらぬまア〳〵こゝを放したまへとやう〳〵に兩方に引わくれば親父息を切ながら。なるほどおれも引分にならうと思ッた。（安永版　書名米饅）

角力好

角力好の亭主けふも見物にゆきしが晝過に青くなりて宅へ歸り。かゝアどんマア水を一杯のませてくれ。おめへまア如何なさッたへ。聞てくれ今日おれが最負の相撲がまけたから思はず傍にあッた徳利を投げたらある關取の頭へぶつかッて負傷をさせたものだから大勢あとから相撲が追かけて來るによッて宅へ逃げこんだ小僧やおもてを見てくれヨモヤもう來やアしめへ。旦那まゐります〳〵志かも黑雲と稲妻と雷がまゐりますトいふに。そいつアこまらねへかゝアどん早く蚊帳をつッてくれ。

ひいきの角力勝たので風を引き
角力取り親にはまけて見事なり
御即位に雲の上まで晴れ勝負
勝闘の聲なりやむで弓の式
ちる花を帶で束れる勝角力

小柳と名つくろもうべ取り結ぶすまひは土に根つくさまなる
力業やめよと人の異見にも耳をつぶしてきかぬ角力取

明代寛則

角力忘年會

すまひ雄の忘年會にうでくらべ　四十八手も　出すかくし藝　星の屋
土に手をつくないとへど年忘れ　酒には勝も　くずす角力雄　露　交
土俵際　おしつまりたる數へ日に　のこるもはツけよい年忘　給馬屋
弟子あまた呼ひよせ鍋や酒にうさ　わするゝ年の闘角力かな　おなしく

▲淨瑠璃　河東節

島の名の都にあはす江戸節の　聲すみ田川　きく舟のうち　桃の屋
聲にさびあれど節にはなまりなく　きたへてかたる名劍揃　秋の屋
幾ふくか　薄茶の後の江戸節も　宇治にあはする掛もの揃　梅　逸
富士ひたひ　向ふに見せて山臺に　むすめの語る清見八景　星の屋
きくうちは榮花の夢の心地してかんたんの外あらぬ江戸節　竹の屋
ひさまはりすみたるあさに家元の　きかせむと出す温泉揃　松　繁

▲俳　優

旅役者はたけのちかふ大根にも　大たはのなをつけた看板　寶市亭
かけて來て申し上げますせりふまでけつまづきては役者御苦勞　夜　宴
評判も　まだ齒をそめぬむすめ形　上々吉の文字の口しろ　和風亭
五右衛門をする初日より江戸役者　はや國々へまはる給姿　牡丹園

交友門

羽織

越後屋から縞ちりめんの羽織が出來て持て來る友達居合せ。その羽織を今夜かしたまへ。これは迷惑まだ袖もとほさぬ。ハテそこを貸すのが男だと無理むたいにかりて行き扨翌日歸り。貴公の御かげて昨夜ゝはねました。さうだらう〳〵。縞がらを賞るやら。さうだらう〳〵。藝者がもらひたがる。さうだらう〳〵。胴裏をほめるやら。さうだらう〳〵。ひらりと脱でやつて來た。さうだらう〳〵。

（文政版　咄安覽）

馬の尾

いまから陸釣にでもゆかうと釣道具を出して見れば針のむすびめから鼠めがくいきッたどうぞ馬の毛がほしいとたづぬる所へ田舎馬が通るこれ幸いとあとから尻尾を二三本ひッこぬくを友達が見て居て。これ手前もとんだ事をする男だ馬の尻尾をぬくといふ事があるものか。ムヽ馬の尻尾をぬけばどうする。如何するどころかとんだ事だといはれもう釣にゆく氣もなく。これとうぞ其わけを言って聞せてくれ一升買ふワ。フム一升かふなら言って聞せうと酒を取寄せまづ二三杯のむ。コレサ氣がおちつかぬ如何いふ譯だといへば。そんならいはふ大事のことだ馬の尻尾をぬくとな。ムヽぬくと如何する。馬がいたがる。（寛政版　盲蕊の花）

富士山

友だち大勢寄ッて。おれは六月富士山へ登る氣じゃ。なんのおもしろうもない。さうでないあの高山の絶頂へのぼるというもいへぬほど景が佳いげな。ナアニ登てよければ西行は下には居ぬ。（未詳）

同

床の間の掛物を見て。ハヽァ探幽書いたり〳〵私は此間富士山へまゐりましたがトントこの通りでムります。ナントあの山の上からは私の宅も見えませうね。めつそうなどうしてあの山からこゝが見えるものか。ハテナ見えるはづだが私共の物干から富士はよく見えますが。（天明版　ふくら雀）

鴨

大勢のはなしに。殿様株に三日なつて見たい。おれは早く隠居になりたい長ばうはなんになりたい。おれかおれは鴨になりたい。座中どッと笑ひ。なぜ〳〵。ハテうまいわサ。（文政版　咄の安寶）

狼

狼と山犬は似たやうなもので知れぬ。これはしたり御身はその目利をしらぬか。イヽヤ知らぬ。しからば己がおしへてやらうが、狼らしいやつが出たら棒をもッてぶつがいヽ山犬ならば逃る狼ならばとびこんで喰ひつく。（同上）

來るほどのやつ親達に用はなし
愛想なさぬ氣だと貸さぬやつ
ばかな親たゞ友達がさもだちが

孟宗

繪などにある雪降りに竹の子を堀て居るが孟宗とやらか。ヲヽヨおのしはまだそれを知らぬか三ッ子でもしッて居る事を。おれも三才兒の時はおぼえて居たが四ッ子の時から忘れた。（明和版　鹿の子餅）

こよみ

吉ぼう變る事もないかとぬッとはいッて見たところ烏帽子大紋でしやにかまへて居る。これは如何だと聞ば。このごろおれは毎日暦の通りにして居る今日は大めう日だからこんな形だ。聞へたと言て歸り又翌日行て見れば棕櫚箒を持ちうろたへて居る。けふはなんだと聞ば。けふは十方にくれた。（同上）

火鉢

より合ッて咄して居る。なんと吉ぼうはよく火鉢の火をいぢる男だなァと噂いふ所へ來て直に火箸をとり火をいぢらうとするを一人の友達知らぬふりにて火箸をとりあげ後へかくせば吉ぼう眞面目になッて火を見つめ口のうちにて。あの火を此方へとッて此火をむかふへやらう。（文政版　咄の安寶り）

新宅見舞

友達をよびて。なんとおれが工夫の新宅だ見てくれ。なるほどよく出來た柱を竹でしたところがどうもいへぬ宜い案じだか竹は節をぬいたらうな。いゝや扱ぬがなぜだ。ハテ燒る時はねて惡い。

（文政版　お伽話）

煙草入

古代の裂にてたばこ入を數々こしらへ自慢を言るものあり望て見れば如何にもおもしろき裂れありまづこの錦はいかう結搆なきれさうにムりますこれはいつ時代のきれでムります。それは實盛が直垂のきれさ。いかさまさうもムりませう又この蝶のちら〳〵見えますは。それこそ曾我五郎が半切のきれでムる。シテまたこゝに白地に赤いところの見えまするは。そりや牛若の大口のきれ其赤いところは齊垣のもやうのきれたのでムる。さてようお集めなされました如何してからは聚りました。みんな人形屋でもらッて來ました。

（明和版　鹿の子餅）

たばこ

煙草入を忘れたほど不自由なものはないドレおまへの煙草、やはらかくば二三服くだされ。イヤわたくしのはきつうムります。そんなら五六服下され。（文政版　お伽話）

燈心

氣樂もの寄合ひ。おのしァ燈心は何方から出るか知ッて居るか。つまらぬへ事をいッたものだ疊のみごからよ。なァにさうぢやァない山吹のしんから出ると爭ッて居る所へ友達來り。それは疊のみごでもなし山吹でもない。シテそんなら何から出る。行燈の引出しから。（同上）

うそつき彌次郎

上方より歸り。さて京都は花の都ほどあッてけしからず上品な所ぢやまづ大道をあるく千菜屋などが烏帽子直垂で足曳の山の芋と呼び紙屑買はちはや振るかみくづ買うといふ雪駄直しは走るもしらぬも逢坂のせきだ直しと申してあるきますといへば側に居るひと。ハテナそして足袋屋などはなんと呼びますな是には大きに困りあたまをかきながら。ヲヽそれ〳〵背家こんの足袋〳〵。（可樂作　江戸自慢）

狼

芝の切通しへ狼が百疋ほど出る。どんだ喧をつくやつだ。イヤサ五十ほど出る。ナニうそを。四五疋はじやうぶに出る。イヤうそだうそだ。マアどうか出さうな處だ。（文政版　咄の安寶）

ひらめ

ゆうべおらが前の下水へ二尺ばかりの平目が游で來ためづらしい事じやァないか。それは飛んだ事のしかしきさまの前の下水はわづか巾が一尺ばかりそれに二尺の平目が游いて來る筈がないが。イヽヤ堅になッて。（安永版　島の町）

十六夜やどの顔見ても月の友　希言
菊を見し戻りに逢ふや親の友　馬年
衣更てさそふ友待あしたかな　青峨
松はつれないが櫻には連があり
人同しからす花見のなかまれ
たえて櫻のなかりせば母安堵
朝歸りだん〳〵家が近くなり
朝歸り一先づ安堵おやぢ留守
我が家へ間者を入れる朝歸り

飲食門

禁酒

酒もらふた温てあるから一杯せい。イヤおれはちと願があつて三年禁酒した。これは心もとない合點がゆかぬ。ハテきびしく飲ぬところを見ておきやれと言て歸る。次の夜みな飲で居るところへ酒のみに來たと言ッて來る亭主もあきれて。それ見やれきのふの事もう破るか。やぶりはせぬがおれもはつめいを出して三年の禁酒を六年にして夜ばかり飲むつもりぢや。是も尤ぢやがとてものこと十二年にして晝夜のみやれ。（延享版　笑布袋）

生酔

樽次といふやうな底なし例の通り近所へ飲にゆき待てども〳〵歸らず。コレ八助や旦那が例の行倒れだらうも知れない一寸そこらを見て來てくれや。ハイかしこまりましたと見廻りしに隣り屋敷のどぶの中へはまり大臥息なれば八助ひきおこさんとするに折節寒中の事にて氷はりつめなか〳〵引ても〳〵動かず宅へかへッて薪割を持て來てむしやうに氷をたゝき碎すと生酔目をさまして。といつらァなんで障子をやぶる。（寛政版　花間笑語）

瓢箪の　口より出る酒なれば　こゝろの駒も　狂ひこそすれ　千尋
春秋の　花のあいてにのむさけは　さくら正宗　きくの正宗　鶴群
世の中に酒てふものゝなかりせば上戸の口はさびしからまし　秋の屋
太平の　餘德とさけもあつかんに腹の虫さへおさまれる御代　鈴志
湯加減を　ためして入る德利にも　つるきの銘の　正宗の酒　露交
風呂敷に　つゝむその名の殷若湯　坊主持ちして　行る角樽　瓦友

蓼

旦那さまゝた隣りから鮒につけてたべますから蓼を下されと申てまゝありました。さてしつッこい昨日も同じ口上でもらひに來てけふも來るはあんまりだが少とばかりやれそして久助隣りへ行ッて蓼につけて食ますから鮒をちッと下されといッて貰て來い。（明和版　鹿の子餅）

戌のとし

友だちより合ひ酒肴にて飲かけしに一人の男むせうに肴をとッては喰ひ〳〵するゆへ。これきさまは何のとしだ。おれかおれは戌の年さ。ナニ戌の歳それで大きに安堵た。ナゼ。もし寅ならばおいらも喰れやう。（明和版　十千萬兩）

饅頭

四五人あつまッて居るところへ痩た色のわるい男が片息になッてがた〳〵とふるへて來て。あとから饅頭賣がまゐりますが私はあの饅頭が怖しくてなりませぬどこぞへ隱して下されといふに物置へかくして置き。饅頭がこわいとはよほど妙だ一ッいやがらしてやらうとあとから來た商人の饅頭をのこらず買ひ戸のすき間から惣がゝりで饅頭をポン〳〵なげこめば内にてあゝ怖いヲゝ怖いと狂ひまわりけるがやがて音も沙汰もなければもしこわがッて死はせぬかと明て見ればあれ程の饅頭をたッた二ッ三ッ前へならべ口なめずりをしながち茶が一ぱいこわい。（同上）

香の物

今度の奉公人は氣轉の利たやつだおれが年寄ゆへ飯もやはらかに焚き何もかも如才がない料理もするであらうコレ八助われは庖刀が利いて居るか。アイさやうでムります。それならなほ宜い茶漬をたべたいが何もないから香の物をうすく切てもッて來いといへば。かしこまりましたとやがて膳を持て來る。さても〳〵見事に薄くきッたはと箸で一きれはさむと一枚ほとつゞいて居るから。これはけしからぬ是ほどの手際で切れはなれぬは如何いふもの八助おぬしはどこの料理屋に居たナ。イヽエ料理屋には居りませぬ。それなら何屋に居たな。ヘエ茂屋に居りました。（寛政版　菅楽の花）

茶かゆ

親父近所へはなしに行て居るところへ子僧きたり。モシ旦那さま茶粥ができましたお歸りなされませと呼に來る親父さう〳〵かへりて小僧をよびつけ。コリヤ外聞の惡い大勢ゐる所で茶粥ができたとは氣の利ぬやつだ今度からたとへ茶がゆであらうとも御飯が出來ましたお歸りなされといふものだとよく敎へて置き又近所へはなしにゆきて居るところへ小僧來りて。ハイ旦那さまお飯が出來ましたお歸りなされといふと。ヲヽ飯が出來たかドレ行てすゝらうか。

（一九作　嘶の藏入）

砂糖

砂糖といふものはもとが唐の砂ぢや。ヲヽ聞えたが甘味はなんでつける。やッぱり砂糖でつける。（文政版　咄の安賣）

初松魚

友達のところから初鰹をもらひ料理せうとおもふにフットおもひ出したは精進日、折角芹子までかいたのに食れぬも業腹と鰹を持て佛壇の前へゆき。モシおやぢ樣この鰹をもらひましたがけふはおまへの御命日だから喰ひやせんそれとも又たべても大事ごぜへせんけりやア必御返事にアおよびやせん。（米詳）

同

釋尊もあれ時鳥それ松魚。と天と地へゆびをさしてムるから初鰹は格別なものさねそれだからわしが天にも地にもたッた一ッといふ袷をまげて買てくひやす。ばかをいひねへあとで困るたらう如何する氣だ。ハテ烏帽子魚の事だからかり衣で居やす。（弘化版　推敲傳）

潮見せばのぼりかれまし初鰹　若狐

晴にけり鰹のぼりの四里四方　梁山

引さけて坐敷へ通る松魚かな　津宮

初の字が五百鰹が五百なり
止めるなと云て身てかけろ鰹賣
尾頭のないが伊勢屋の初鰹　蜀山人

鎌倉の海より出しはつ松魚　みな武藏野のはらにこそいれ
あほしさも松さもいへば初鰹　片身はすまのしほ燒ちふし　錢屋金持

神代にもだます工夫は酒がいり
孝行を水にはなさぬ養老酒
飲むことは飲うが出來ぬ詩一篇
大あくび柳の御神酒を見附出し
酒屋の戸錢でたゝくは馴たやつ
新世帶こわ飯が出來かゆが出來
併なやく匂ひに上戸いさま乞ひ
ごく懇意すり鉢で出すとろゝ汁
止事を得ずこのわたをみんな飲

奴婢門

無精な供

コレ三助おのしはいつでも無精な男だチト月代でも剃て髪を結たがいゝ着物もよごれたから洗濯をしやれ明日供に連るからといひつけ翌る日出る先になッて見ると又いつもよりわるい躰、旦那大きに腹を立ち。ゆうべいひつけたに髭ぼう〳〵と湯にも入らず其やうなざまは何事だといへば三助あたまをかき。ヘイ左樣なら手拭でもかぶッてお供と見えぬやうに參りませう。（寛政版　喜美談語）

真ッ黒になッてはたらく白鼠
番頭も外ではおもしろい男
雲の顏番頭色師とは見えず
朝歸り番頭烏雀を内で聞き

御年玉

新玉の春門には松を飾り家内雑煮喰て居るところへ大黒屋福右衛門御慶申入ます〳〵御機嫌よく御越年なされまして目出度ございますといふ所へ男が金拐子なげこむ。これは〳〵御年玉かたじけなうムりますといふて歸しさて〳〵よい物をくれた幸いだおろしてつかへと給仕して居る下女にやれば下女持て勝手へたち。これ長助どの江戸では金拐子の事を御年玉といふか。（安永版　稚獅子）

幟竹

五月の節句に幟竹洗へといひつけられ畏りましたと前の川へ入めッたにこすッて居る、旦那もあまり暇がいると行て見られれば手元ばかり洗ひて先の方は煤だらけ、旦那あきれて。コリヤ手元ばかり洗ふて先の方はなぜあらはぬといへば。ハイそれでも彼所は深うムります。（延享版　笑布袋）

柱暦

はしら暦をとゝのへ下女にいひ付貼せければ。モシ旦那さまこれをはりますれば何のお役に立ますへ。それがそれはな今年中のことがしれるは。ヘエそんなら芝翫はどこへ出ます。（文政版　咄安寛）

本家へ注進

權助本家へゆき。わしらが旦那は狐でムります。それは怪からんなぜ〳〵。されば今朝承ればお一人言にまづ此暮は尾を見せなんだと仰せられました。（同上）

灸

侍女を呼び灸を點させしにたび〳〵落すゆへ旦那にしかられ次の間へ來り。コレおせんどの聞なせへ咎い旦那ちやアないか度々おとすからすえへるなとよ一土器おどしした所が四文だ。（安永版　咄上手）

氣轉者

年若けれど萬事によく用の足りる召使ひあり。朝は起るると手水を汲み齒磨に楊枝をそへて置き手水をつかふうちに煙管を掃除して煙草盆に火を入れて茶をくんで佛壇へ燈明をあげて置き手紙を書うと思ふと直に墨をすり卷紙に小刀糊と揃へるといふ氣轉者なるに今朝は主人が氣分のあしきに何所へ行しにやと思ふ所へ歸り來りしゆへ汝は朝からどこへ行しぞと問へば。夜前のお顏色がわるう見えましたゆへお醫師さまを呼にまゐりましたといふに。それはいつもながら感心とほめそれより服藥して四五日になれど本復せずつれ〳〵なるまゝ右の男を呼べば居ず、ハテ何所へ行しやと思ふところへ立歸りければ主人いづこへと問へば。へイ御樣子がよくムいませんからお寺へ知らせに參りました。（文政版　お伽話）

借上

有德なる旦那奧座敷より手をたゝき藥を温めて持て來いといはれけるを茶の間に居たる侍女聞ちがへ茶を汲でさし出せば旦那は藥と心得て茶碗を取ていたゝかれければ侍女めはじきして。御內室が見てムりますぞへ。（浮瓢箪）

飯蛸

飯蛸が煮て鼠入らずに入てあるを小僧內證にて摘み喰をする所を內儀がだしぬけに障子をあけて。長松なにをして居るといはれ、びッくりするはづみに摘みかけた飯蛸をころ〳〵と落せば南無三顯れたりとおもひながらもぬからぬ顏にて轉げた飯蛸をとッてそとへ投り出し。おとゝひ來い。（安政版　笑の種蒔）

目をさまし丁稚もぐさを拂のけ叱られた下女膳立のにぎやかさ
蟹を見に茶臺あらさふ下女はした

丁稚

おらが旦那は人づかひのわるい人だ日がな一日供につれてあるき歸ると使ひにやる大方用をしまッたと思へば手習ひをしろとぬかしをる。（梅屋敷）

十徳

醫者のめしたき旦那にむかひ。お前さまの羽織はひとのとは違ひますといふに。これは羽織ではない十徳といふ者じや即ち居れば羽織の如く立ば衣のごとく、ごとくとごとくで十徳ぢやと聞て是はよい事を覺えたと直に近所へゆき。十徳の譯をしッて居るか。いや〳〵しらぬ如何いふ譯だ。されはまづ居れば羽織に似たり立ば衣に似たりこれはしたり。（安永版　初登り）

さがろ乳母雪廢の顔へいさま乞ひだん〳〵と葛籠の孕むかたい下女どのくらわから美人だと下女まトめ

竹光

神田邊を折助が酒に醉て千鳥足を子供がはやして。ヤイなまゑいやいべらぼうめと笑ふを聞て。なんだ生醉だうぬいつ酒をのませたおれが好でおれが飲むに推參なやつだ。〔子供〕すいさんもすさまじい折助やいのろまやいとはやす。もう了簡がならぬ眞二ッにするぞと脇差にそりをうつと。ワアイ切れるなら切て見ろ拔けやい〳〵といふゆゑ耐へかねてスラリと拔ば竹光。それ見やアがれそれで切れるものかやアい〳〵と笑へば。なにうぬら片ッ端からとげを立る。（寛政版　開卷百笑）

おさらばを宵にして置く宿下り
我が供へ茶を汲むで出す宿下り

下女の戀

戀すれば水仕は胸をもやしたり
まゝならぬ身に氣も引て見る　曙　雀

提灯

夜ばなしの歸りみち〳〵家來と話しながらもどれば家來もはなしつきて。モシ旦那この提灯にはなぜ鎖りをつけたものでござります。それはモシ理不盡なものが切た時きれはなれぬ用心ぢや。シテその時はたれがもちます。（米詳）

豆腐

下女だん〳〵と出世してめし焚をつかふやうになり臺所へ出て。コレさんや何やら白いものが盆の上に戴てあるがあれはなにエ。ヘエどれでムりますへ。エヽそれそこに半丁ばかり。（天明版　ふくら雀）

こあはせは三世の縁を二世にするお背中をきつくながすが返事なりさそふ水下女汲みに出る手管なり畑か下りたら誘めさうな下女かな

雪

小僧よ庭の雪はどれほど積つた尺度でさして來い。アイと口小言いひ〳〵さして來る如何だ知れたか。アノ深さは一尺と五寸巾はどうも知れませぬ。（同上）

新參の使

これ歩助この手紙を入福富右衛門樣へ持ていけ。ハイ何所でムります。なんでも此通りをまつすぐに行てな辻番へつきあたつて聞ていけ。畏まりましたと手紙を受取まつ直に行て辻番の榛側へおもいれつき當れば辻番親爺腹を立て。エイ畫ひなか目が見へぬか如何したものだ。ハイ私はどッちへ行くのでムります。（蝶夫婦）

鏡山下女が忠義の天下一
魂か磨きぬく下女天下一
お竹どのどうだと凡夫皆なを打ち

口上

此頃となり屋敷ではよく口上をいふ家來を抱えたといふ事だがなんと聞にゆかうと二三人いで合せゆきければ。主人これは〳〵ようこそお出なされました定めて家來が事をお聞なされてのお出なるべしさいわい只今使ひに遣しましたればおしつけ歸りませうといふ所へ家來かへりて言ふやう。今日はようお使ひを下されまする仰せ下されます通りだん〳〵冷氣に趣きまするいよ〳〵御別條もござりませずお目出度存じます今晩は新蕎麥とあつてわたくしまで召し呼はれ忝う存じまするそれへ參ッてお禮を申しませうト定めて仰有るでムりませうが今日はお留守でムります。（文政版　お伽話）

つぢらをも　おのが背負て山出しの　お宿はどこささがす雀屋　星の屋
うけ宿の　内儀の口もまめ鳩の　ぽつぽをあてにはめるお酌女　柳の屋
三助のうけ宿は湯のあつい世話　ながしたあかの他人なれども　都柳軒

長座

いつも來ると長居する客が歸りし跡にて主人小僧にむかい今度あの人が來たら帶に頬冠りをさせて立て置けといひつけゝるに次の日また來りしかば小僧こゝぞと思ひ早速いひつけ通りこしらへしがもしやまた違つては居まいかと、客と話しをして居る主人の前へぬッとさし出し。これで宜しうムりますか。（今人　清風亭作）

落書

新らしい壁に落書してありしを旦那が見附け。たれがこんないたづらをしたのだト見世中の小僧を質せど白狀するものなし。しかしいたづらにしては成田屋の顔はよッぽどよく出來て居るといへば一人の小僧。それはわたくしでムります。（今人　梅素作）

元日

「板の間の光るは下女のかゞみなり」とは狂句のうがち、されどかやうの召し使ひ世に少なし、一月元旦屠蘇くまむとせし處へ箒片手に下女の入來、我家はいまだ舊例のまゝ今日は掃除におよばずといへば、はちきれさうな滿面に笑を堪へ。まァお正月は何につけても宜しうムいますね。（今八　春窓機作）

慾情門

奴の喧嘩

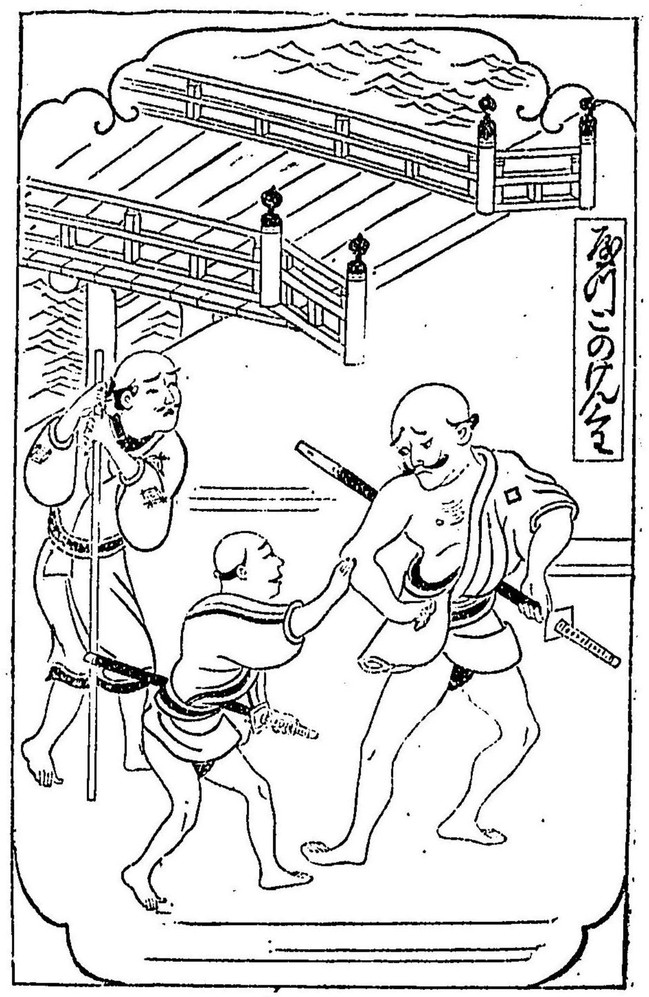
さる町奴に顔の腸どく助と申おのこありける、堺町へ見物に來るとて親父橋を八文字に踏みちらし四方をねめまはして通る、又むかふよりなるほど小さき男、これも利ぬ風にて大脇差横たへ鼻唄にて來りける橋の眞中にて行あたり、双方脇差に手をかけ既に喧嘩と見えしときどく助大きなる男なればかさにかゝり、小漢まなこ開けといふ。小さき男きかぬ者にて。うぬが眼あけといふ、互ひに言葉荒くなり大脇差に手をかけんとしたる時、小男申けるは。やい男が小さいとて呑まるゝ物ではない山椒は辛いさといふた。近所に番太郎居て山椒は小粒でも辛いといふべきにと思ひ小粒がおちた〳〵といへ

ば、兩方下卑たる奴にてまことの小銀がおちたかと思ひ下ばかりながめて、双方にがわらひになりて別れ、つひに喧嘩になりませなんだ。（貞享版　鹿の武左衛門口傳咄）

桃の屋

ひもときて秋の長夜をなぐさめん

露がはなしや鹿の卷紙



硝子

さて近々に金儲けのつるに取つく事が出來た。それは耳よりどうじや〳〵。されば先年から川々に埋れたる金銀おびたゞしくあるによツて取出す工夫を附たがどうだ。それは面白いおれも半分乘たい。それならば舟を借りたまへとて兩人舟に打乘り兩國の邊へ乘り出し兼て用意の大硝子を取出し此中へはいりたまへと入てよく口をしめ綱をつけて水底へさげどうじやあるか〳〵。あるとも〳〵金銀わきざし金物おびたゞしい。ソンナラ早く取りやれ。手が出ない。

（安永版　島の町）

金のなる樹

金のなる樹をもツて居ると聞て知音の人來りて。根を分て下されといろ〳〵所望すれば。こなたは慾のふかい人ゆへ進ぜ難したとへ金がなッても待兼て青い内にむしらるゝであろといふた。（浮瓢箪）

よくばり

コヲ八やてめへむやみと金錢をほしがるが命を賣ても金がほしいか。ほしいどころぢやアねへ大金にありつく事ならこんな命の一や二はおしくねへ殺されても本望だといふを大金持の旦那きゝつけて。そんなら千兩やるからおれの思ふ存分に打れて死ぬかといはれしばらく考へ。なんと物は御相談だおめへさんも千兩お出しなさるのはついえだから私をまア半殺しにして五百兩おくんなさい。

（安政版　笑の種話）

つり

わしは此間釣に出て金を五十兩財布のまゝつッて來たと話せば。そんなら己もと慾心まん〳〵たる男品川沖へ出て大きな鮹を釣り上げ針をぬいて海へなげこみ。忌々しいうぬぢやアねへ。（文政版　お伽話）

茗荷

旅籠屋の女房亭主にむかひ。今夜泊ッた客の行李は餘程のものと見へるどうぞ忘れて行ばいゝがトいふに亭主。ヲヽ宜い案じがある何でもむやみに茗荷を喰せて見ようト汁も菜もみな茗荷を澤山入てもてなしける故翌朝客の立しあとにて。大方忘れて行ッたらうに座敷には何もなし。さて〳〵茗荷も利ぬトいへば亭主。利いた〳〵。ソリヤ何を。ヲヽ旅籠代を忘れて行ッた。（輕口　浮瓢箪）

身にすぎし　重きつゞらを背負ふ人の　いましめ草やまた切り笹　竹芝浦人

三ツ子にも　善をすゝむる伽はなし　乳母のさへつる舌切すゞめ　泡の屋

惣花におもき枕をやり手あげ

松飾りいけ懸どしい・物ばかり

答書用

頭巾

しはい女房。モシ旦那へ今夜は已まちだから辨天樣へまゐッて來やすと化粧をして出た所がおしろいを鼻のさきばかりぬッて居るゆへ亭主肝をつぶし。てめへも、みとうもねへなぜ鼻のさきばかり塗て居やるといへば。これで宜うムりやすお高祖頭巾をかぶッて行て來やすから。（天明版　書名未詳）

いや〳〵とにぎ〳〵　伊勢屋子に教へ

志はいやっ哀れな酒にばかり醉ひ

せち辛いやっ藪醫者にかけて見る

小刀細工根性の錆たやつ